

24 『フォーゲット・ミー・ノット』 成井豊

○ジャンル／SF

○ストーリー／1970年4月、小学6年の吉野てるみは、母の節子が運転する車で帰宅する途中、事故に遭う。男が突然、車の前に飛び出してきたのだ。急いで男を病院に運ぶが、彼は記憶を失っていた。彼の持ち物を調べると、P・フレックという会社の社員証が見つかる。そこに記された名前は、春山恵太。節子は春山に、記憶が戻るまで自分の家に住めと言う。しかし、春山は何も思い出せない。唯一頭に浮かんだのは、「クロノス・スパイラル」という意味不明の言葉だけだった……。

○出演者／男5＋女7＝計12

○上演時間／120分

キャスト

春山恵太
吉野てるみ（中学1年）
吉野絹代（てるみの祖母）
吉野伝次郎（てるみの祖父・映画館館主）
吉野節子（てるみの母・女優）
吉野稲子（てるみの叔母・高校教師）
春山敏郎（映写技師）
榎戸達矢（医師）
梅坂三千代（看護婦）
柿沼純子（馬車道ホテル副支配人）
栗崎健（馬車道ホテルフロント係）

檜原 弥九郎 (馬車道ホテル施設係)
若月 まゆみ (P・フレック開発4課課長代理)
野方 耕市 (P・フレック開発4課課長)

急ブレーキの音。一九七一年四月一日夕、横須賀サクラ館の前。春山恵太が地面に倒れている。デイパックを背負っている。そこへ、吉野てるみ・吉野節子がやってくる。

節子 (恵太に) もしもし? 大丈夫ですか? もしもし? もしもし?

てるみ 死んじゃったのかな?

節子 そんなわけではないでしょう。車にはぶつかってないんだから。

てるみ でも、倒れた拍子に、頭を打って、頭蓋骨が割れて、中身がドバツと。

節子 出ないでしょう、中身は。(恵太に) しっかりしてください。もしもし?

てるみ やっぱ死んじゃったんだよ。どうする、お母さん?

節子 とりあえず、救急車を呼ぼう。あんたはここで待ってて。

恵太が上半身を起こす。てるみ・節子が叫ぶ。恵太が地面に座る。

てるみ よかった。生きてた。

節子 (恵太に) あの、お怪我はありませんでしたか?

恵太 え?

節子 怪我ですよ、怪我。体のどこかに痛い所はありませんか?

恵太 痛い所?(両手で自分の体を触り、頭を触ったところでウツと呻く)

てるみ
節子

やっぱり頭を打ったんだ。
(恵太に) でも、血は出てないみたいだけど。

そこへ、吉野絹代・吉野伝次郎がやってくる。

絹代
てるみ
節子

てるみ、今の音は何だい？
お母さんが前を見てなくて、この人を轢きそうになつて。

(絹代に) 違う違う。この人がいきなり車の前に飛び出してきたの。私はすぐ気づいてハンドルを切つた。この人も避けた。だから、ぶつかつてはいない。

伝次郎

じゃ、なぜこの人は地面に座つてるんだ。

てるみ

倒れた拍子に、頭を打つたみたい。

絹代

(恵太に) 痛むんですか？

恵太

ええ、少し。でも、別に怪我はしてないみたいです。

絹代

あんた、ウチのお客さんだね？

伝次郎

そうなのか？

絹代

間違いないよ。(恵太に) 私の顔、覚えてない？ 今朝、その映画館の受付で、あんたに切符を売つただろう？

恵太

さあ。

絹代

私は覚えてるよ。あんたは今朝の一回目の上映が始まる直前に、一人で来た。

伝次郎

一回目が終わった後、売店で牛乳とカレーパンとコロツケパンを買つた。二回目が終わった後は、ジャムパンとクリームパンを。
(恵太に) あんた、ウチにパンを食いに来たのか？

恵太 すみません。覚えてません。
絹代 そんなはずない。あんた、パンを買うたびに、私にいろいろ聞いたよね？

恵太 名前とか歳とか。
ごめんなさい。何も思い出せないんです。

節子 もしかして、頭を打ったから？

恵太 記憶を失くしたって言うの？ そんなバカな。

恵太 おじさん、名前は？

恵太 ……クロノス・スパイラル。

恵太 え？

恵太 クロノス・スパイラル。この言葉しか思い出せない。

そこへ、五人以外の登場人物たちがやってくる。恵太以外の十三人が恵太に話しかける。が、恵太にはその声が聞こえない。逆に恵太が話しかけると、十三人は次々と去っていく。

四月一日夜、榎戸医院の診察室。恵太が椅子に座っている。そこへ、榎戸達矢・梅坂三千代がやってくる。榎戸は白衣を、梅坂はナース服を着ている。

梅坂 お待たせしました、春山さん。検査の結果が出ましたよ。

榎戸 (恵太に) 安心してください、春山さん。頭蓋骨も脳波も異状ナシです。外

傷も頭皮が少々腫れているだけで、切れたり裂けたりはしていません。つまり、ほとんど無傷と言っているだけ。

梅坂 よかったですね、春山さん。

恵太 でも、僕は何も思い出せないんですが。

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

恵太

榎戸

それは、頭を打ったショックで、記憶が一時的に混乱しているからです。医学用語で言えば健忘、いわゆる記憶喪失というやつですね。しかし、これも時間が経てば、必ず回復します。

時間というのは、どれくらい？

それは人によりけりです。早い人なら一日か二日。まあ、中には死ぬまで回復しない人もいますが、それは非常に稀なケースです。

僕はなるべく早く回復したいんですが。

気持ちはわかりますが、焦るのはよくない。ここにしばらく入院して、心と体を休めてください。いいですね、春山さん？

あの、僕は本当に春山って名前なんでしょうか？ 今一つ実感が湧かなくて

でも、さつき、財布の中身を確認したら、社員証が入ってましたよね？

これですか？（財布から社員証を取り出す）

（社員証を読んで）「P・フレック開発四課研究員・春山恵太」。あなたが

持っていた財布に入っていたんだから、あなたの物に間違いないでしょう。

でも、P・フレックって名前にも全く覚えがないんです。

だったら、リュックサックの中身も確認してみたらいかがですか？

そうですね。（デイパックの中を覗いて）シャツとパンツと靴下が入ってま

す。（封筒を出して）これは何だ？（封筒から札束を出して）うわ。

聖徳太子がいつぱい。全部で百枚ありますよ。

それはおそらく旅行資金でしょう。あなたはそこのお金と着替えを持って、旅

行に出たんだ。

でも、どうして横須賀に？ 別に観光地でもないのに。

旅行の目的が観光とは限らない。たとえば、誰かに会うためとか。

恵太
梅坂
恵太
（ノートパソコンを出して）これは何だろう。
機械みたいですね。今流行りの電卓じゃないですか？
（ノートパソコンを開いて）いや、電卓じゃありません。見てください。キ
イボードにローマ字が並んでる。

榎戸
恵太
わかった、タイプライターだ。
いや、タイプライターでもありません。えーと、何て名前だったかな。ここ
まで出かかっているんだけど。

梅坂
恵太
頑張ってください、春山さん。
：：クロノス・スパイラル。

梅坂
恵太
クロノス・スパイラル？ この機械はクノロス・スパイラルって言うんです
か？

恵太
榎戸
たぶん、違います。何かを思い出そうとすると、決まってこの言葉が頭に浮
かんでくるんです。一体、何なんだろう。
クロノスはギリシャ神話に出てくる「時間」の神の名前。スパイラルは英語
で「螺旋」のことですよ。

恵太
榎戸
つまり、「時間の神の螺旋」ってことですね？ 全然意味がわからない。
まあまあ、焦らなくても、すぐに思い出しますよ。私が保証します。

榎戸・梅坂が去る。
四月七日昼、榎戸医院の病室。恵太がベッドに座って、ノートパソコンを見ている。そ
こへ、てるみ・絹代・節子がやってくる。

てるみ
またその機械を触ってるの？ 使い方はわかった？

恵太

てるみ

(ノートパソコンを示して)このキイを押したら、電源が入った。でも、ここにパスワードを入れないと、動き出さないみたいで。

恵太

てるみ

合言葉のこと。試しに、クロノス・スパイラルって入れてみたけど、ダメだった。

恵太

絹代

恵太

節子

僕は自分のことが何も思い出せない。合言葉にしそうな言葉が何も浮かばないんだ。
あれから七日も経つのに、何の変化もないのかい？
ええ。榎戸先生には「とりあえず退院して、普通に生活しながら、回復を待つてみては」って言われました。

絹代

恵太

絹代

頭以外はどことも悪くないんでしょう？ だったら、さっさと退院した方がいいよ。お金の無駄だよ。
(恵太に)そのことなんだけどね、あなたの治療費、私に出させてもらいたいんだ。

てるみ

節子

絹代

あんたも一緒に大笑いしてたでしょう？
運転手がのけぞって笑っちゃダメだよ。
(節子に)この人が記憶を失くしたのはあなたの責任なんだ。ちゃんとお詫

びしなさい。

(恵太に)ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。ごめんね。

でも、あなたの車が来るのに気づかなかった僕にも責任はある。お金のことはどうか気にしないでください。幸い、僕には所持金がたくさんあるし。

でも、退院した後は？

問題はそれだ。僕は家に帰れないから、どこか住む所を探さなくちゃいけない。(絹代に)この辺りに安いアパートはありませんかね？

だったら、ウチに来れば？ ウチの映画館、元々は芝居小屋だったから、楽屋があるんだ。

でも、あそこは敏君が住んでるじゃない。

広いから、もう一人ぐらい住めるよ。(絹代に)記憶が戻るまで、置いてあげようよ。敏君には私から頼むからさ。

治療費を出させてもらえないなら、それしか償いの方法はないね。(恵太に)ウチの従業員と相部屋になるけど、構わないかい？

僕は全然。その、敏君て人さえよければ。

名前は春山敏郎。ウチで映写技師をしてるんだよ。へえ、その人も春山って名字なのか。

そこへ、梅坂がやってくる。

梅坂 春山さん、先生の手が空いたので、診察室へ来てください。

恵太 わかりました。梅坂さん、僕は今日、退院します。

梅坂 え？ もう住む所が見つかったんですか？

恵太

こちらの皆さんが「ウチに來い」って言うてくださって。えーと、何て映画館でしたっけ？

てるみ

横須賀サクラ館。館主は私のおじいちゃんだよ。

恵太

(梅坂に) その楽屋に住むことになったんです。

梅坂

サクラ館なら、私もよく見に行きます。今は何をやってるんですか？

節子

アーサー・ヒラー監督の『ある愛の詩』。主役のライアン・オニールが最高

にカッコいいよ。

てるみ

(梅坂に) でも、可哀相なんだ。最後に恋人が死んじゃうんだ。

絹代

こら。話のオチをバラすんじゃないよ。

梅坂が去る。

四月七日夕、横須賀サクラ館の事務所。吉野稲子が椅子に座って、本を読んでいる。そこへ、恵太・てるみ・絹代・節子がやってくる。

てるみ

ただいま。

稲子

お帰り。(恵太を見て)もしかして、姉さんに轢き殺されそうになった人?

節子

オーバーなこと言うんじゃないの。この人は春山恵太さん。今日からここに住むことになった。(恵太に)こいつは私の妹の稲子。

稲子

(恵太に)吉野稲子です。初めまして。

絹代

てるみ、おじいちゃんを呼んできて。はい。

てるみが去る。絹代がお茶を淹れる。

稲子

(節子に)ねえねえ、ここに住むことになったって、どういうこと?

節子

この人は榎戸医院を退院したの。でも、記憶が戻ってないから、自分の家はどこにあるかわからない。で、この楽屋に置いてあげることにしたってわけ。

稲子

敏君の部屋に? 敏君がいいって言うかどうかとも確かめないで?

絹代 あの子は氣立てのいい子だ。イヤって言うわけないよ。そんなことより、どうしてあんたがここにいるんだい。私は受付にいてくれて言ったはずだよ。喉が乾いたから、お茶を飲んで。今、戻ろうと思ってたの。そんな調子で、よく学校の先生が務まるね。後はやっというて。
稲子 はいはい。

絹代が去る。稲子がお茶を淹れる。

恵太 (稲子に) 失礼ですが、前にどこかでお会いしてませんか？
節子 え？ あんたたち、知り合い？
恵太 それはわかりませんが、稲子さんの顔には何となく見覚えがあつて。
稲子 たぶん、人違いだと思いますよ。私は全く記憶にありません。
恵太 そうですか。あなたは学校の先生なんですか？
稲子 横須賀中央高校で理科を教えます。今は春休みなんです、ここの手伝いを。
恵太 理科っていうと、生物ですか？ 化学ですか？
節子 物理です。今、「女のくせになぜ物理を」って思ったでしょう？ でも、私にとつてはごく自然なことだったんです。子供の頃からロケットが好きで。
恵太 (恵太に) 一昨年、アポロ十一号が月へ行つたじゃない。あの日は学校をずる休みして、テレビにかじりついてたんだって。
恵太 アポロ十一号……。
節子 嘘。それも覚えてないの？
恵太 ニール・アームストロング、マイケル・コリンズ、バズ・オールドリン。
節子 何よ。よく知ってるじゃない。

恵太
稲子

ええ。でも、データとして覚えてるだけで、当時の記憶は全くありません。それはつまり、一般的な常識は覚えてるけど、自分の経験は覚えてないってことですか？

恵太

一般的な常識についても、怪しいです。たとえば、「鼻血ブー」。

節子

谷岡ヤスジのマンガでしょう？ 去年流行ったよね。

恵太

でも、僕は知りませんでした。てるみちゃんに「鼻血ブー」って言われても、

節子

何のことかわからなくて、呆れられました。それから、『黒ネコのタンゴ』。

恵太

皆川おさむ。去年の大ヒット曲。

節子

この曲も知らなくて、もっと呆れられました。

恵太

『白い色は恋人の色』、『圭子の夢は夜ひらく』、『ドリフのズンドコ節』。

節子

それも全部、曲のタイトルですか？

恵太

信じられない。あなた、本当に日本人？ 昨日まで、足柄山で熊と暮らして

恵太

たんじやないの？

稲子

さすがに親子だな。てるみちゃんにも全く同じことを言われました。

恵太

あの子は姉さんに似て、口が悪いから。後で注意しておく。

節子

それはやめてください。てるみちゃんには本当に感謝してるんです。毎日お

恵太

見舞いに来て、話し相手になってくれて。

節子

自分のことが何も思い出せない、不安だろうね。

恵太

不安なんてもんじやないですよ。自分はこれからどうなるんだろうって考え

恵太

ると、夜も眠れません。だから、皆さんにも感謝してます。こんな僕に「ウ

そこへ、てるみ・伝次郎がやってくる。

てるみ

伝次郎

呼んできたよ
(恵太に) あんたに会うのは二度目だな。横須賀サクラ館館主、吉野伝次郎だ。(右手を差し出す)

恵太

伝次郎

(伝次郎と握手して) 春山恵太です。大体の話はてるみから聞いた。節子のしたことについては、俺も申し訳ないと思ってる。ウチの楽屋でよければ、いつまでももいてくれ。

恵太

てるみ

よかったね、おじさん。でも、敏君と喧嘩しないでよ。

稲子

節子

(稲子に) 俺もお茶。
はいはい。(お茶を淹れ始める)
(恵太に) 住む所が決まったら、次は仕事だね。お金はたくさん持ってるみたいだけど、働かないとすぐになくなるよ。

恵太

節子

そうですね。でも、記憶のない僕に何ができるのか。
お父さん、ウチの映画館は今、人手不足だよね？

節子

稲子

そんなことはない。おまえと稲子が手伝ってくれば、何とかやっつけていける。稲子はともかく、私を頼りにするのはやめて。ここにいつまでいられるか、わからないし。

伝次郎

節子

姉さん、東京へ戻るの？
私は今すぐにでも戻りたいの。お父さんさえ、ウンて言ってくれれば。なるほど。彼をここへ連れてきたのは、自分の後釜にするためだったのか。それは誤解。私はあくまでも、彼のためを思って。

伝次郎

だったら、俺も彼のためだけを考えよう。(恵太に) 君は映画が好きか。

恵太

好きかどうかはわかりませんが、映画に関することはいろいろ覚えてます。まず最初に頭に浮かんだのは、『スター・ウォーズ』ですね。

伝次郎

恵太

え？ とつても有名な映画ですよ。続編もいっぱい作られたし。

稲子

それってSF映画？ 星と星が戦争するの？

てるみ

わかった。おじさん、『猿の惑星』と間違えてるんじゃない？

恵太

間違えてない。『スター・ウォーズ』は『スター・ウォーズ』だ。

伝次郎

そこまでムキになる所を見ると、かなりの映画好きのようだな。だったら、合格だ。明日から、ウチで働いてくれ。給料は絹代と相談して決める。

恵太

それで、仕事の中身は？

伝次郎

君は体力がありそうだから、館内の清掃を頼む。期待してるぞ。

恵太

よろしく願います。

節子

稲子、恵太さんを楽屋に案内してあげて。

てるみ

私も行く。

恵太・てるみ・稲子が去る。

節子

（伝次郎に）で、例のお願いのことなんだけど。

伝次郎

その話はきっぱり断ったはずだ。何度言われても、答えは同じだ。

節子

（小声で）この頑固ジジイ。

伝次郎

何か言ったか？

節子

別に。さて、私も楽屋へ行ってこようかな。

稲子が去る。伝次郎も去る。
四月一日夜、楽屋。恵太・てるみが椅子に座って、話をしている。そこへ、春山敏郎がやってくる。

てるみ

敏郎

敏君、お疲れ様。今、お茶を淹れるね。(お茶を淹れる)

ありがとう。春山さんですよ。僕は春山敏郎です。まさか同じ名字の人が同僚になるとは思いませんでしたよ。

恵太

敏郎

いきなり転がりこんで、すみません。

そのことなら、気にしないで。この部屋は、一人で住むには広すぎる。実はちよっぴり寂しかったんですよ。

恵太

敏郎

そう言ってもらえると、ありがたいです。僕は春山恵太です。よろしく願いします。

敏郎

「けいた」？ 下の名前は「けいた」って言うんですか？ ちなみに漢字で書くと？

恵太

てるみ

「恵む」に「太い」で恵太です。

(敏郎に)名は体を表す。太さに恵まれてるんだよ。

敏郎

てるみ

(恵太に)驚いたな。僕の祖父と全く同じ名前ですよ。敏君のおじいちゃんも太さに恵まれてたの？

敏郎

てるみ

いや、むしろ痩せていた。(恵太に)祖父は僕が中学生の時に亡くなったんですが、バカがつくほどの映画好きでした。僕もよくお供をさせられました。一番最初はなんと五歳の時ですよ。

てるみ

敏郎

映画は何？ 『誰が為に鐘は鳴る』。(恵太に)アメリカ映画だから、当然、字幕ですよ。

てるみ
敏郎

てるみ

敏郎

恵太

敏郎

恵太

敏郎

恵太

敏郎

恵太

てるみ

恵太

てるみ

恵太

てるみ

普通、五歳の子供に見せようと思えますか？ でも、これが意外と楽しめたんだよな。

イングリッド・バーグマン、クレイだったもんね。

そうそう。子供心にドキっとしたのを覚えてる。スペインの山岳地帯の景色もすばらしかった。(恵太に)それから何度もお供をしているうちに、自分も映画好きになったんです。

それで映写技師になったの？

まあね。恵太さんも、映画はお好きなんでしょう？

ええ、たぶん。

事故があつた日、朝からぶっ続けて見てましたよね。ウチの映画館、映写室から客席が覗けるんですよ。

あなたは記憶を失う前の僕を見たんですね？ 一体どんな様子でした？

別に監視してたわけじゃないから。でも、態度はごく普通でしたよ。

でも、普通のお客さんが三回も続けて見ますか？

さすがに三回は珍しいです。だから、映画好きだと思つたわけで。

僕は本当に映画を見に来たんでしょうか？

どういう意味？

僕のリュックサックには、着替えと百万円が入っていた。榎戸先生は、旅行に出たんじゃないかと言つた。誰かと会うために。

誰かつて、誰？

わからない。でも、君のおばあちゃんは、僕に名前や歳を聞かれたつて言つてただろう？

じゃ、おじさんが会いたかつたのは、ウチのおばあちゃん？

敏郎

絹代さんとは限らないんじゃないかな。この映画館にいる人なら、誰でも可能性がある。たとえば、てるみちゃんとか。

てるみ

(恵太に) 一体誰に会いに来たの？ 会って、何をするつもりだったの？

恵太

：：クロノス・スパイラル。
またそれ？

そこへ、稲子がやってくる。

稲子

お邪魔します。てるみ、あんた、まだここにいたの？ もうすぐ十時だよ。今、帰ろうと思ってたの。

稲子

せっかく姉さんがウチにいるんだから、もつと甘えればいいのに。私はもう子供じゃない。明後日から、中学生だよ。

稲子

文句はいいから、二人に「お休みなさい」を言いなさい。

敏郎

敏君、明日も遅番だよね？ お昼までは暇だよね？

てるみ

そうだけど、まだどこかへ連れていけって言うのか？
おじさんの会社へ行ってみようよ。(恵太に) おじさんが持ってた社員証に、住所が書いてあったよね？

恵太

確か、横浜だったかな。でも、君が何のために？
おじさんの記憶を取り戻すの。そうすれば、おじさんが誰に会いに来たか、

敏郎

わかるじゃない。
それはいい。(恵太に) 僕は横浜生まれの横浜育ちなんですよ。きっとお役に立てると思います。

恵太

すみません、僕なんかのために。

敏郎
恵太

それで、恵太さんがいた会社の名前は？
(社員証を出して) P・フレック。

てるみ・稲子・敏郎が去る。

二〇一〇年二月二十日夕、新宿にある喫茶店。桑名努が椅子に座って、携帯電話を見て
いる。そこへ、恵太がやってくる。

恵太

桑名、遅くなってごめん。

桑名

いや、俺の方こそ、急に呼び出して、すまなかった。どうしてもおまえの顔
が見たくて。おまえ、痩せたな。

恵太

わかるか？ この一月で五キロ落ちた。

桑名

どうせろくに食べてないんだろう。今夜は満漢全席をご馳走してやるからな。
途中でギブアップするなよ。

そこへ、ウエイトレスがやってくる。グラスを一つ持っている。

ウエイトレ

いらっしやいませ。(恵太の前にグラスを置いて)ご注文は？

桑名

いや、僕らはもう出ます。(恵太に)中華街へ行こう。店は予約してある。

恵太

(携帯電話を示して)ほら、この店だ。

桑名

悪いけど、今は食欲がないんだ。話はここで済ませよう。(ウエイトレスに)

桑名

コーヒーを一つください。
しょうがないな。じゃ、僕もコーヒーをおかわり。(カップを差し出す)

ウェイトレ （受け取って）かしこまりました。

ウェイトレスが去る。

桑名

気持ちにはわかるけど、飯はちゃんと食った方がいいぞ。病気にでもなったら、どうするんだ。

惠太

朝飯は食った。今は一日一食で充分なんだ。

桑名

お袋さんが亡くなってからずっとか？

惠太

ああ。明日でちょうど一月になる。

桑名

悪かったな、葬式に出なくて。

惠太

おまえはアメリカにいたんだ。出られるわけがない。いつ日本に帰ってきたんだ？

桑名

一昨日だ。で、昨日、大学に顔を出したら、春山さんは二月も前に辞めまして、たつて言うじゃないか。それで慌てて電話したんだ。

惠太

じゃ、俺が何をしたか、もう知ってるんだな？

桑名

実験中に爆発事故が起きたんだろう？

惠太

起きたんじゃないかって、起こしたんだ。おかげで、三人の学生が重傷を負った。

桑名

それなのに、彼らを指導していた俺は無傷だった。

惠太

爆発の原因は学生のミスだったって聞いたぞ。

桑名

だからって、俺の責任が軽くなるわけじゃない。

おまえってやつは昔からそうだな。まじめって言うか、律儀って言うか。せっかくなか教授まで出世したのに、もったいないとは思わなかったのか？ お袋さんだって、悲しんだらう。

恵太 いや、「おまえの思う通りにすればいい」って言ってくれた。
桑名 息子が息子なら、母親も母親だ。
恵太 お袋には苦勞のかけつばなしだった。だから、一刻も早く再就職をと思って
たんだけど。

桑名 心筋梗塞だったそうだな。
恵太 倒れた次の日に亡くなったよ。本当にあつと言う間だった。あまり苦しまず

桑名 に済んだのがせめてもの救いだ。

桑名 お袋さん、映画が好きだったよな。

恵太 そうだよ。よく知ってるな。

桑名 おまえの家へ遊びに行った時、ビデオで『タイタニック』を見てた。週に三
本は借りるって言ってた。

恵太 お袋の実家は横須賀で映画館をやってたんだ。俺が生まれた時にはもう潰れ
てたけど。

桑名 忘れられないのか、お袋さんのこと。

恵太 まだ一月しか経ってないんだ。忘れられるもんか。

桑名 でも、いつまでも無職というわけには行かない。そろそろ再就職したらどう
だ。

そこへ、ウエイトレスがやってくる。カップを二つ持っている。

ウエイトレ お待たせしました。(テーブルにカップを置く)

桑名 (恵太に) どうなんだ。再就職する気はあるのか。

恵太 それは俺だって、いい加減、何とかしなくちゃと思ってるけど。

桑名 よし、後は俺に任せておけ。ウエイトレスさん、レシートをください。

ウエイトレ (レシートを差し出して) どうぞ。あの、コーヒーは？

桑名 もちろんいただきますよ。春山。

惠太 おう。

惠太・桑名 (コーヒーを一気に飲んで) ご馳走様でした。

ウエイトレ どういたしまして。

ウエイトレスが去る。

二月二十日夜、横浜にあるマンション。若月まゆみが椅子に座って、本を読んでいる。そこへ、惠太・桑名がやってくる。

若月 お帰り、桑名君。ずいぶん早かったのね。中華街へは行かなかったの？

桑名 こいつが食欲がないって言うんで。まゆみさんは夕食は？

若月 今頃、桑名君は満漢全席を食べてるんだろうな。そう思ったら、悔しくて悔

しくて。だから、ラーメンとチャーハンと餃子を作って食べた。もう満腹。

桑名 食べ残しは？

若月 何もない。食べたかったら、一から作って。

惠太 ちよつといいですか？ 僕の記憶に間違いなければ、桑名は僕と同じく、彼

桑名 女いない歴三十三年だったはずですが。

惠太 三十二年だ。去年のクリスマスでストツプした。

桑名 この裏切り者。

惠太 そう言うだろうと思って、打ち明けられなかったんだ。まゆみさん、僕は飲み物を用意してくる。後はよろしく。

桑名が去る。

若月 (恵太に) それじゃ、私のことはまだ何も聞いてないのね? 初めまして。

若月 まゆみです。

恵太 春山恵太です。桑名とはいっ、どこで知り合ったんですか?

若月 去年の十二月にロサンジェルスで。学生時代の友達が向こうに住んでて、一

若月 カ月ほど遊びに行ったの。その時、友達が開いたホーム・パーティーに、彼

恵太 が来て。

若月 あなたに声をかけた?

恵太 そう。話をしていいるうちに、二人とも研究者で、専門分野も近いことがわか

若月 っ、すっかり盛り上がっちゃって。で、クリスマスに二人で『アバター』

恵太 を見に行っ。

若月 で、フォーリン・ラブ?

恵太 私は年明けに日本に帰ってきたんで、それから遠距離恋愛。でも、彼が本

若月 社に呼び戻されたおかげで、こうして一緒に暮らせるようになったの。

恵太 今はまさに幸せの絶頂ってわけですね。おめでとうございます。

若月 ありがとうございます。でも、幸せの絶頂っていうのは誤解よ。

恵太 どうしてですか?

そこへ、桑名がやってくる。ウイスキー瓶、アイスペール、グラスを三つ持っている。オンザロックを作り始める。

桑名 惠太 若月 桑名 惠太 若月 惠太 若月 桑名 若月 惠太 若月 桑名

まゆみさんは今、会社を休職中なんだ。半年前に起きた事故のせいで。事故って？

守秘義務があるから、詳しいことは言えない。でも、その事故のせいで、私が所属していた開発四課は活動停止になったの。

（惠太に）まゆみさんがロサンジェルスに来られたのは、そのおかげなんだけどな。

（若月に）しかし、いくら何でも、半年は長い。なぜ転職しないんです。私以外のメンバーはすぐに転職した。でも、私はどうしても諦められなくて。何をですか？

開発四課は新型の機械を開発中だったの。あと一歩で完成するところだったのよ。

（惠太に）そこで、おまえに白羽の矢を立てたわけだ。

（惠太に）あなたの話は桑名君から聞いた。鷺田大学理工学部の准教授で、専門分野は内燃機関。あなたが来てくれれば、開発が再開できるの。

でも、僕は実験で事故を起こした人間です。

それは私も同じよ。でも、たった一度の失敗で、それまで積み上げてきたものを捨てるのは、間違ってる。

僕はそうは思いません。僕のせいで、三人の学生が重傷を負った。

怪我ぐらい何よ。私が起こした事故は……。

まさか、死者が出たんですか？

それは言えない。でも、私は絶対に諦めない。今、諦めたら、あの事故は無駄だったってことになるから。

（惠太に）そこで、俺から提案なんだかな。試しにまゆみさんの会社へ見学

若月 に行ってみないか？ 実際はその目で見れば、気持ちが変わるかもしれない。
（恵太に）そうしてそうして。あなたにぜひ会ってほしい人がいるの。私の

上司。

恵太 わかりました。でも、答えは行つてからですよ。

桑名 これで話はまとまったな？ じゃ、とりあえず乾杯するか。ほら、グラスを

持つて。それじゃ、俺とまゆみさんの幸せを祝つて、乾杯。

恵太 なんか納得できないけど、乾杯。

三人がグラスを合わせて、ウイスキーを飲む。

恵太 （まゆみに）そう言えば、若月さんの会社の名前を聞いてませんでしたね。

何て名前なんですか？

若月 P・フレック。

桑名・若月が去る。

一九七一年四月八日朝、横浜の路上。恵太・てるみ・敏郎がやってくる。恵太は社員証と地図を持っている。

4

てるみ

何これ？ 見渡す限り、畑じゃない。建物なんか、どこにも建ってないじゃない。

恵太

ない。(恵太に) 本当にここで間違いないの？

敏郎

間違いない。社員証に書いてある住所は、確かにここだ。

てるみ

あそこに畑を耕してる人がいます。この畑の持ち主じゃないですか？

敏郎

おじさん！ ここはおじさんの畑？

てるみ

額いてる。

敏郎

いつから？ え？ そのポーズはどういう意味？

恵太

あれはチョンマゲだよ。江戸時代って意味じゃないか？

てるみ

なぜジェスチャーで答えるんだ。しゃべればわかるのに。

敏郎

おじさんはここで何を作ってるの？ そのポーズもわからない！もしかして、お姫様？ 馬車？ 十二時？ わかった、シンデレラだ！

恵太

そうじゃなくて、カボチャって意味じゃないかな？

てるみ

そうか。P・フレックのPはパンプキンだったのか。いや、それはないな。

恵太

おじさん！ 教えてくれて、ありがとう！

恵太

どういうことだ。この住所は間違ってるのか？

敏郎

この近くに、僕の友達が勤めているホテルがあります。そこへ行って、聞いてみましょう。

てるみ

何てホテル？

敏郎

馬車道ホテル。(恵太に) そいつはそこのフロント係なんですよ。

馬車道ホテルのフロント。栗崎健が立っている。そこへ、恵太・てるみ・敏郎がやってくる。

敏郎

栗崎！

栗崎

春山、おまえ、ここへ何しに来た。今日は仕事は休みなのか？

敏郎

遅番だから、昼過ぎまで空いてるんだ。実はおまえに聞きたいことがあって。

栗崎

そちらの二人は？

敏郎

この人は俺の同僚で、俺と同じ名字の春山恵太さん。それから、この子は。

栗崎

その娘さんか。

てるみ

違う。私は敏君の友達の吉野てるみ。全然顔が似てないでしょ？

恵太

てるみちゃん、僕らはしばらく黙ってしよう。

栗崎

(敏郎に) で、俺に聞きたいことって？

敏郎

(社員証を差し出して) これはこの人の社員証なんだけど、俺たちはこのP・フレックって会社を探してるんだ。

栗崎

そんなの、本人に連れてってもらえばいいだろう。

敏郎

ちよつと事情があつて、この人は覚えてないんだよ。だから、まずはこの住所に行ってみただけど、そこはなんとカボチャ畑だった。

栗崎

この電話番号にはかけてみたか？

敏郎
栗崎

もちろん、かけた。でも、繋がらなかった。
ということは、この社員証自体が偽物なんじゃないか？ たとえば、詐欺師

敏郎
恵太
栗崎

が人から金を騙し取るために作ったとか。
そうか。その可能性はあるな。
ないない。僕は詐欺師じゃない。
確かに、悪いことをしそうな人には見えない。(奥に向かって) 純子さん、
ちよつといいですか？

そこへ、柿沼純子がやってくる。

純子
栗崎

(敏郎を見て) あら、ご宿泊のお客様？
いいえ、こいつは僕の友達です。それより、これを見てください。(社員証
を差し出して) このP・フレックって会社に見覚えはありませんか？

純子
敏郎
てるみ

ない。一体何をしてる会社？
それは僕にもわからないんです。
(純子に) じゃ、この人のことは知らない？ 社員証の持ち主の春山恵太。

純子
てるみ

あなたのお父さん？
違う。私とは赤の他人。顔が全然似てないでしょ？

恵太
純子

(恵太に) 前にお会いしたことはないですよ？
それが僕にはわからないんです。僕は一週間前、事故で記憶を失くしたんで。

純子
栗崎

ええ、僕も今日が初対面です。

そこへ、榎原弥九郎がやってくる。修理道具を持っている。

純子 榎原君、ちよっと待って。あなた、この人に会ったことはない？ お名前は

春山恵太さんで仰るんですけど。

榎原 いや、ありません。

純子 この人、記憶を失くしたんだって。一週間前に事故で。

榎原 それはお気の毒に。でも、お会いするのは初めてですよ。

榎原 そう言わずに、もっとよく見てよ。先に言っておくけど、この人と私は赤の

他人だからね。

榎原 それは言われなくてもわかるよ。でも、本当に会ったことはない。力になれ

敏郎 なくて、ごめん。わかりました。お仕事の邪魔をして、申し訳ありませんでした。

恵太・てるみ・敏郎が去る。

榎原 (純子に) 今の人、自分の顔を知ってる人を探し回ってるんですか？

栗崎 いや、会社です。なぜか自分の会社の社員証を持って、この会社を知らな

榎原 いかって。それが、P・フレックっておかしな名前の会社で。

榎原 P・フレック？ 今、P・フレックって言ったのか？

純子 榎原君、知ってるの？

榎原 いや、どこかで聞いたことがあるような気がして。でも、僕の勘違いだった
ようです。

純子・栗崎・樽原が去る。
四月八日昼、横須賀サクラ館の事務所。絹代が椅子に座って、帳簿をつけている。そこへ、恵太・てるみ・敏郎がやってくる。

てるみ

ただいま。

絹代

お帰り。あんたたち、表で節子を見なかった？

てるみ

見てないよ。お母さん、またいなくなっちゃったの？

絹代

二回目の上映が始まるまでは、受付に座ってたんだけどね。今、覗いたら、

てるみ

もぬけの殻。

絹代

また駅前の喫茶店で油を売ってるんじゃない？

てるみ

一つ走りして、連れ戻してきてくれるかい？

てるみが去る。絹代がお茶を淹れる。

絹代

全く節子には困ったもんだよ。目を離すと、すぐに抜け出すんだから。

敏郎

節子さんは受付がやりたくないんですよ。自分の顔を知ってる人が来ると、

絹代

話しかけられるから。

敏郎

あの子はそこまで売れっ子じゃないよ。

恵太

でも、この前、言ってみましたよ。大学生にサインを求められたって。

絹代

え？ 節子さんて有名人なんですか？

恵太

違う違う。たまに映画に出てるだけだよ。それもちよい役で。

絹代

でも、映画に出てるってことは、女優さんなんですか？

敏郎

高校を卒業して、すぐにデビューしたんです。デビュー直後は結構大きな役をやってましたよ。僕は小学生だったけど、キレイな人だなんて憧れてました。今でも節子さんと話をする時はちよつと緊張します。あんたがそうやってチャホヤするから、あの子が付け上がるんだよ。あ、そろそろ交替の時間だ。僕、映写室へ行きます。

敏郎が去る。

恵太
絹代

絹代さんは、節子さんが女優になることに反対だったんですか？
そんなことはないよ。でも、あの子はデビューした次の年に、てるみを身籠もった。相手は妻子持ちで、手切れ金を押しつけて、ハイサヨナラだよ。これで女優は引退するだろう。そう思ってたから、てるみを産んで一年もしないうちに、東京へ戻った。あの子一人で。

恵太
絹代

てるみちゃんを残して？
それからはずっとちよい役。いや、近頃は滅多に仕事が来なくなつて、生活費さえ稼げなくなつた。で、とうとうここに帰ってきたんだよ。

恵太
絹代

じゃ、これからはてるみちゃんと一緒に暮らすんですね？

あの子がそんなに素直なタマかい。帰ってきたのは、うちの旦那から金を借りるためさ。でも、旦那はウンと言わない。で、仕方なく、ここを手伝ってるんだ。

恵太
絹代

そうか。それで昨夜、「今すぐにも戻りたい」って言ってたんだ。
あの子も今年で三十三だ。いい加減、踏ん切りをつけてもいい歳だよ。

そこへ、てるみ・節子がやってくる。

節子

絹代

節子

絹代

節子

てるみ

節子

そこへ、伝次郎がやってくる。

節子

伝次郎

節子

伝次郎

節子

伝次郎

節子

絹代

誰がいい歳だつて？

何でもないよ。

ごまかしても無駄だよ。どうせ私の悪口を言つてたんでしよう？ 三十二に

もなつて、受付の仕事もまともにできないのかつて。

わかつてるなら、つべこべ言う前に謝つたらどうだい。てるみが見てるんだ

よ。

ごめんなさい。てるみも悪いことをしたら、こうやって素直に謝るんだよ。

私は悪いことなんかしない。

生意氣言うんじゃないの。

（絹代に）じゃ、私は受付に行つてくるね。
待て、節子。おまえに話がある。

悪いけど、後にして。私は受付に行かないと。

何が「行かないと」だ。本当はウチの仕事なんかやりたくないんだらう。

正直に言っちゃえば、そう。

最初にやるつて言い出したのはおまえだぞ。

だつて、お父さんはなかなかお金を貸してくれないし、かと言って、他にす

ることもないし。

まじめに働いたのは最初の一週間だけだつたね。

節子

伝次郎

節子

伝次郎

節子

伝次郎

絹代

節子

絹代

節子

絹代

節子

伝次郎

節子

伝次郎

節子
てるみ

それですっかりイヤになったの。近所の人たちが次から次へとやってきて、「節子ちゃん、女優は辞めたの？」って。みんな、陰で笑ってるんだよ。「あいつは自分が売れなくなったから、切符を売ってる」って。事実だから、仕方ない。

娘が笑い者になってるのに、同情してくれないの？俺は身から出た錆だと思うがな。

もういい。私、出ていく。

金はどうするんだ。俺は貸すとは言っていないぞ。

(節子に)東京に戻っても、映画の仕事はないんじゃないの？心配しないで。テレビに出るから。

テレビ？でも、あんた、テレビに出るのは二流の役者だって。昨日まではそう思ってたけど、もう贅沢は言ってもらえない。さっきマネージ

ヤーに電話したら、「テレビの仕事なら、いくらでもある」って。

だからって、おまえがやらせてもらえらるとは限らないだろう？

まあ、見ててよ。今にテレビで一番の女優になってみせるから。

てるみはどうする。一緒に連れていくんだらうな？

それは無理。テレビの仕事が軌道に乗ったら、迎えに来る。

そのセリフは何度目だ？てるみはこの歳になるまで、母親と暮らしたことがない。可哀相だとは思わないのか？

今度という今度は本当。だから、てるみ、もう少しだけ我慢してくれるよね？
(うなづく)

てるみ・絹代・伝次郎・節子が去る。

一九七一年四月八日夜、楽屋。敏郎が椅子に座って、本を読んでいる。そこへ、恵太がやってくる。

敏郎

お疲れ様です。今まで掃除ですか？（お茶を淹れる）

恵太

うん。お客さんが少なかつたから、あんまり汚れてなかつたけどね。

敏郎

俺がここに来たのは六年前ですけど、その頃はもつとお客さんが入ってましたよ。『サウンド・オブ・ミュージック』なんか、超満員でした。

恵太

あの映画は僕も大好きだな。長女の役の女の子が可愛かつた。

敏郎

知ってます？ 横須賀には多い時で、二十以上も映画館があつたそうですよ。

恵太

そんなに？

敏郎

でも、テレビの放送が始まったら、次々と潰れていった。ウチの映画館も心配です。

恵太

でも、僕が雇えるくらいだから、まだ余裕はあるんじゃないか？

そこへ、てるみがやってくる。紙を持っている。

てるみ

（紙を差し出して）ねえねえ、おじさん、これを見て。

恵太

（紙を見て）「この人を知りませんか？」

てるみ

このポスターを横浜中に貼るの。いいアイデアだと思わない？

恵太

発想は悪くないと思うけど、この顔、僕に全然似てないよ。

てるみ

そんなことない。そっくりだよ。

敏郎

仮に、このポスターを恵太さんの知り合いが見たとしよう。「へえ、恵太の

てるみ

やつ、行方不明になったんだ」って思うよね？ そう思うだけで、「僕は恵

恵太

太の知り合いです」とは言ってこないんじゃないかな。

てるみ

じゃ、言葉を変えよう。「私は誰ですか？ 春山恵太」

恵太

それはちよつと恥ずかしい。この顔はもつと恥ずかしい。

そこへ、稲子がやってくる。

稲子

お邪魔します。(てるみに) またここにいる。明日は入学式でしょ？ さっ

てるみ

さと寝なさい。

敏郎

私は敏君たちと話し合いをしてるの。

てるみ

それはまた明日にしよう。このポスターについては、僕と恵太さんでよく検

敏郎

討しておくから。

恵太

そう言っつて、結局はボツにするつもりでしょう？

てるみ

そんなことはしないよ。ねえ、恵太さん？

恵太

もちろんだとも。でも、てるみちゃんはどうしてこんなに熱心に僕を助けて

てるみ

くれるんだ？ 僕のことより、お母さんの方が心配じゃないの？

恵太

私が心配しても仕方ないよ。お母さんはいつでも自分の思った通りにする人

恵太

だから。でも、てるみちゃんだって、もう中学生なんだから、自分の意見を言っても

てるみ
いいんじゃないかな。お母さんと一緒に行きたいなら、行きたいって。
やめてよ。私に指図しないで。

てるみが去る。

恵太
（稲子に）余計な口出しでしたかね？
稲子
ううん。今のセリフは私が言うべきだった。子供の時から姉さんのワガママ

敏郎
でも、てるみちゃんのためを思うなら、言いたんだけ思う。

恵太
べきじゃないですか？ すみません、生意気を言っ
いや、敏郎君の言う通りだ。明日、てるみちゃんに謝るよ。

稲子
そんなことより、恵太さんの会社のことだけど、社員証に書かれた住所はカ

敏郎
ボチャ畑だったんだって？
話を聞きに行った友達には「社員証自体が偽物なんじゃないか」って言われ
ました。

恵太
（稲子に）もしそうだとしたら、春山恵太って名前も嘘だったことになる。

稲子
僕は一体どうしたらいいんでしょう？
警察へ行って見たら？ 事情を説明して、搜索願が出てる人のリストを見せ
てもらおうのよ。

敏郎
そうか。恵太さんが記憶を失くして、今日で八日目。八日も家に帰ってこな
かったら、家族は間違いない検索願を出す。

恵太
でも、もし僕が独り暮らしだったら？
稲子
もちろん、その可能性はある。でも、試してみる価値はあるんじゃない？

恵太　　そうですね。明日、警察へ行ってみます。

そこへ、節子がやってくる。

節子　　こんな時間にずいぶん賑やかじゃない。

節子　　てるみなら、ついさつき、家に帰ったよ。表で会わなかった？

節子　　私は恵太さんに話があつてきたの。(恵太に) 悪いけど、ロビーに来てくれない？

敏郎　　話ならここを使つてください。僕は銭湯へ行つてきますから。

敏郎　　じゃ、私も行こうかな。

稲子　　稲子さんの所には風呂があるでしょう。

稲子　　ウチはいまだに五右衛門風呂じゃない。たまに広いお風呂に入りたくなるのよ。(節子に) じゃ、後はお一人で。

稲子・敏郎が去る。

恵太　　僕に話だなんて、珍しいですね。

節子　　面倒臭い前置きは省略して、本題に入るね。私に五十万貸してほしい。

恵太　　それはまたずいぶん突拍子もない話だな。あなたが僕と知り合いになったのは、ほんの八日前です。借金を頼むには、付き合いが浅すぎると思いますが。

節子　　他に頼める人がいないのよ。

恵太　　伝次郎さんがダメなら、絹代さんか稲子さんに頼むつていう手があるんじゃない。

節子 恵太 節子

ないですか？
無駄よ。二人とも、私が東京に戻ることに反対なもの。

お友達は？
切符を売ってる姿を見られただけでも恥ずかしいんだよ。お金を貸してくれなんて言えると思う？ 借りたお金は一年以内に必ず返す。担保は私の部屋にある家具と洋服。一年を一日でも過ぎたら、全部売っていい。担保は私の部屋
担保なんかいらぬ。お金は今すぐお貸ししますよ。

恵太 節子 恵太

本当？
ただし、一つだけ条件があります。てるみちやんと一緒に連れて行ってください。赤の他人にこんなことを言われるのはイヤでしょうけど、子供を育てるのは母親の義務です。

節子 恵太 節子

てるみちは私というより、ここにいた方が幸せなのよ。
聞いたよ。そうしたら、一緒に暮らすのは、お母さんが主役をやれるようになつてからでいいって。

恵太 節子

それが子供の強がりだとは思わぬんですか？
もういい。今の話は忘れて。

節子 恵太 節子

節子さん。
てるみちを連れていくわけにはいかないの。今付き合ってる彼氏には、独身だ
って言ってるんだから。

節子が去る。

恵太

俺に何ができる。自分の名前も思い出せない俺に。

恵太が去る。

四月八日夜、横須賀サクラ館の前。節子がトランクを持ってやってくる。後から、絹代・伝次郎がやってくる。

伝次郎

待て、節子！

節子

私のことはもうほっといて。

絹代

話はまだ終わってない。いいから、中に入るんだよ。

節子

もう時間がないの。あと十分で、終電が出ちゃう。

絹代

だったら、出発は明日にすればいいじゃないか。

節子

そういうわけにはいかないの。明日の朝、事務所で面談がある。ウチのプロ

ダクシヨンの社長と。これからはテレビも出ます。だから、仕事をください

ってお願いするの。

伝次郎

それは明後日に延期してもらえ。

節子

ウチの社長は忙しいの。そんなワガママを言ったら、今度こそクビを切られる。

伝次郎

だったら、おまえの方から辞めてやれ。今日できっぱり女優の仕事から足を

洗うんだ。

節子

お父さん、よくそんなことが言えるね。

伝次郎

俺が何か間違ったことを言ったか。

節子

私がデビューした時は、近所に招待券を配り回って、大はしゃぎしたくせに。

節子

てるみを産んで、もう一度、女優に戻りたいって言った時も、思う存分やつ

伝次郎
節子

てこいつて言ったくせに。
あの時のおまえはまだ若かった。今はいくつだ。もう三十二だろう。
だから、今度は諦めろって言うの？ それってあまりに勝手すぎない？ 私
の人生を何だと思ってるの？

そこへ、恵太・てるみがやってくる。

てるみ

お母さん！

恵太

(節子に) じゃ、あなたはてるみちゃんを何だと思ってるんですか？

節子

娘よ。決まってるでしょう？

恵太

だったら、明日が何の日か、わかっているはずだ。

節子

何の日？

伝次郎

バカ！ てるみの中学の入学式だ！

絹代

(節子に) せめて入学式には出てやりなよ。あんた、あの子の母親だろう？

節子

悪いけど、お母さんが代わりに出て。てるみ、それでいいよね？

恵太

いいわけないでしょう。中学の入学式は一生に一度なんですよ。

節子

卒業式には必ず出る。だから、許して。

伝次郎

節子、おまえ、いい加減にしないか！

伝次郎が節子を叩こうとする。その手に、てるみがしがみつく。

てるみ

やめて！

伝次郎

てるみ、放せ！

てるみ

お母さんを行かせてあげて！ お母さんはスターになりたいんだから！ 私
もスターになつてほしいんだから！
わかつた。わかつたから、もう放せ。
てるみ、ごめんね。行ってきます。

伝次郎
節子

節子が去る。

絹代

どうしてあの子は気づかないんだろうね。夢を見てもいい時期はもう過ぎた
つてことに。

伝次郎
絹代

あいつは大馬鹿者だ。
でも、私たちの娘なんだから、見捨てるわけには行かないよ。

てるみ・絹代・伝次郎が去る。

二〇一〇年三月一日朝、P・フレックの会議室。恵太が椅子に座っている。そこへ、若月・野方耕市がやってくる。若月はノートパソコンを持っている。

若月

春山君、お待たせ。この人が開発四課の課長の野方耕市さん。

恵太

(野方に)初めまして。春山恵太です。

(野方に履歴書を差し出して)これ、春山君が書いてきてくれた履歴書です。ただし、彼が今日ここへ来たのは、P・フレックがどんな会社か、自分の目で確かめるのが目的です。彼の入社を希望しているのは私であって、彼ではありません。そのことをお忘れなく。

(恵太に)合格だ。

は？

君の入社を許可する。ようこそ、P・フレックへ。

私の説明を全然聞いてませんでしたね？ いいですか、野方さん。彼は我が社に入りたいとは一言も言っていないですよ。

しかし、彼は今、無職なんだろう。いい年をした男が仕事もしないでブラブラしているのはよくない。(恵太に)今すぐ、我が社に入りたまえ。

でも、まだ何も話してないのに。

俺はひと目で君が気に入った。それだけじゃ、ダメか？

野方
恵太

野方

若月

野方

恵太

野方

若月 野方 惠太 野方 惠太 野方 惠太 野方 惠太 野方 惠太 野方 惠太 野方 惠太

せめて、その履歴書を見てからにしてください。顔だけで決めるなんて、彼に失礼です。

わかったわかった。(履歴書を読んで)「春山恵太、一九七六年十二月九日生まれ、三十三歳、男。現住所は新宿区中落合」。(恵太に)これは実家か？

そうです。僕は生まれも育ちも新宿です。

ご家族は？

いません。父は僕が小学生の時に亡くなりました。それから、母が女手一つで育ててくれたんですが、今年の一月に心筋梗塞で。

一月？ ほんの二月前じゃないか。

正確には一月半です。お恥ずかしい話ですが、いまだにショックから立ち直れてません。

母一人子一人で暮らしてきたんだもの。当然よ。

(恵太に)君が研究者になったことを、お母さんは喜んでくれたんだろう？

それはもう。恵太は自慢の息子だと褒めてくれました。

だったら、君はもう一度、研究に復帰するべきだ。亡くなったお母さんのためにも。

しかし。

君に見せたいものがある。ついてきてくれ。

え？ 履歴書の確認はもうおしまいですか？

これだけ確認すれば充分だ。善は急げと言うだろう。

彼に見せたいものっていうのは？

決まってるだろう。クロノス・スパイラルだ。

でも、彼はまだ我が社に入社すると決まったわけじゃないんですよ。社外の

野方 人間にスパイラルを見せたら、守秘義務に反することになります。心配するな。彼は間違いなく入社する。スパイラルを見て、研究意欲の湧かないやつがいるもんか。

若月 それじゃ、開発四課の活動を再開してもいいんですか？

野方 半年も休めば、充分だろう。社長には俺が掛け合うから、安心して待ってる。来たまえ、春山君。

P・フレックの実験室。恵太・若月・野方がやってくる。

野方 ここは開発四課の実験室だ。半年前に活動停止になるまで、クロノス・スパイラルという機械を開発していた。名付け親は、ここにいる若月君だ。

恵太 え？ 野方さんじゃないんですか？

野方 俺は開発三課の課長も兼任していて、普段はそっちで仕事をしている。つまり、四課の実質的な責任者は若月君なんだ。

恵太 ということは、生みの親でもあるわけですね？

若月 私 は 基本的な理論を考えただけ。実際に作ったのは、私の部下たちよ。

野方 若月君、シャッターを上げてくれ。(恵太に) 見る。これがクロノス・スパイラルだ。

若月 (恵太に) その前に、一つだけ約束して。ここで見たこと、聞いたことは、社外の人間には絶対に漏らさないこと。たとえ、家族であっても。

恵太 守秘義務ってやつですね？ 了解しました。

野方 じゃ、気を取り直して、もう一度。見る。これがクロノス・スパイラルだ。

若月がノート・パソコンのキイを叩く。シャッターが上がって、クロノス・スパイラルが現れる。

恵太

野方

想像以上に大きいですね。しかも、ずいぶんおかしな形をしている。

恵太

野方

デザインしたやつがミリタリーオタクだったんだ。第一次大戦中の複葉機をモデルにしたらしい。

恵太

野方

で、これは一体何をやる機械なんですか？
物質を過去に飛ばす機械だ。

野方

恵太

過去に？ まさか。
若月君、君が作った機械だ。君が説明してくれ。

野方

若月

わかりました。(恵太に) そもそもその始まりは、野方さんが開発三課で作った機械だったの。名前は――

野方

若月

その話はしなくていい。今後も一切口にするな。
でも、私が時間螺旋理論を思いついたのは、野方さんが作った――

野方

若月

俺は口にするなど言っただけだ。(恵太に) 俺が昔作った失敗作の話だ。俺にとっては忘れてしまいたい過去だから、君も興味を持たないでくれ。

恵太

若月

了解しました。今の話は聞かなかったことにします。
じゃ、気を取り直して、時間螺旋理論について。私の研究によれば、時間は上から下に向かって流れている。(ポケットから巻き貝を出して) まるでこ

恵太

若月

の巻き貝のように。

恵太

若月

それ、いつも持ち歩いてるんですか？
この螺旋を後ろに向かって遡るのは非常に難しい。時間の流れに、すぐに押し戻される。でも、よく見て。後ろじゃなくて、すぐ上の部分にポンって飛

野 恵 野 若 野 恵 野 恵 野 若 野 恵 野
方 太 方 月 方 太 方 太 月 方 太 月 方 太 月 方 太

び移れば、話は簡単じゃない。

(恵太に) 螺旋の周期は三十九年。一瞬で三十九年前に行けるんだ。

でも、そのためにはとてつもないパワーが必要なんです。

その通り。実際、宇宙ロケットの数万倍のパワーが必要だった。でも、改良

に改良を重ねて、去年の九月に目標の数値に達成した。

達成？ それじゃ、この機械は実際に物質を過去に飛ばしたんですか？

一人の男が三十九年前に行った。ただし、無許可で。開発四課が活動停止に

なったのは、その事故が原因だ。

その人は四課のメンバーだったんですか？

名前は秋沢里志。君と同じ、内燃機関の研究者だった。

(恵太に) あなたをウチに誘ったのは、秋沢君に代わって、エネルギー・シ

ステムを担当してほしかったからなの。

それで、その秋沢って人は、本当に三十九年前に行けたんですか？

私はそう信じてる。でも、残念ながら、証拠はない。

(恵太に) 秋沢からの報告がないからだ。

(恵太に) 彼は三十三歳で三十九年前に行った。ということは、今は七十二

歳になって、地球上のどこかにいるはずなのよ。でも、私たちには連絡して

こない。

(恵太に) 可能性は二つある。一つは、三十九年前には辿り着けなかった。

もう一つは、辿り着くことはできたものの、それから三十九年の間に亡くな

ってしまった。

もし亡くなかったとしても、その前に連絡することはできたはずですよ。

それはどうかな。たとえば事故か何かで、急死したとしたら？ 死なないま

恵太

若月

恵太

若月

恵太

若月

恵太

恵太

野方

恵太

でも、頭を強く打って、記憶を失ったとしたら？

そういう確率はかなり低いと思いますが。

あなたは秋沢君が三十九年前に行ってないって言いたいの？

そうじゃなくて、証拠がない限り、この機械が完成したとは言えないってこと

とです。

でも、どうやって証拠を手に入れるの？ 警察に捜索願を出して、七十二歳

の秋沢君を探す？ それとも、別の人を三十九年前に飛ばす？

別の人を飛ばした方が、話は早いでしょうね。

それがそう簡単には行かないのよ。一度、三十九年前へ行ったら、もうこの

時代には戻ってこれられない。そんな機械に乗りうって人がすぐに見つかると思

う？

僕が乗りますよ。

春山君、君は今、何て言った？

僕が乗ると言ったんです。僕には家族もいない。仕事もない。僕がいなくな

って困る人は一人もいません。僕が三十九年前に行って、クロノス・スパイ

ラルの力を証明してみせます。

若月・野方が去る。

一九七一年五月九日夜、横須賀サクラ館の楽屋。てるみ・敏郎が椅子に座って、話をしている。そこへ、恵太・稲子がやってくる。敏郎がお茶を淹れる。

7

稲子

てるみ

稲子

てるみ

稲子

てるみ

敏郎

恵太

稲子

敏郎

てるみ

ただいま。

お帰り。どうだった、警察は？

行方不明になった人って、結構いっぱいいるのね。日本全国で一年間に約十万人だって。

そんなに？

でも、恵太さんの場合は、行方不明になったのが四月一日ってわかっているじゃない？ さらに、男性で、歳は三十前後って絞っていくと、その数はなんと三十人。（紙を広げる）

（紙を見て）それだけ？

（稲子に）で、この中に恵太さんらしき人物はいたんですか？

いなかっただ。身長が近い人は体重が違ったり、その逆だったり。

（敏郎に）警察の人は、ご家族はまだ捜索願を出してないんじゃないかって言っただ。しばらく待ってから出す人も多かったです。

でも、今日で丸一カ月ですよ。

おじさんの家族は薄情だね。おじさんのことが心配じゃないのかな。

恵太
てるみ
僕は家族の厄介者で、いなくなつて清々してるのかもしれない。

恵太
てるみ
僕は否定してほしかったんだけど。

恵太
てるみ
だつて、記憶を失くす前のおじさんがどんな人だったか、わからないじゃない？

恵太
てるみ
い。もしいなかっぺ大将みたいなたら？

恵太
てるみ
ごめん、いなかっぺ大将って誰？

敏郎
稲子
アニメの主人公。音楽を聞くと、急に踊り出して、真っ裸になるの。

稲子
敏郎
僕が家族だったら、間違いなく、見捨てるだろうな。
二人とも、恵太さんをからかうんじゃないの。(恵太に) 諦めるのはまだ早いですよ。ご家族が捜索願を出してくれるのを待ちましょう。

稲子・敏郎が去る。

五月十日昼、横須賀サクラ館の事務所。絹代・伝次郎が椅子に座っている。絹代は帳簿をつけている。伝次郎は新聞を読んでいる。そこへ、恵太・てるみがやってくる。

絹代
てるみ
(てるみに) どうだった、今度の映画は？

恵太
てるみ
あんまりおもしろくなかった。(恵太に) ねえねえ、『ファイブ・イージー

・ピース』ってどういう意味？

恵太
てるみ
たぶん、五つの簡単な曲だと思うよ。

伝次郎
絹代
話に全然合っていない。主役のジャック・ニコルソンも目つきが悪くて、カツ

コよくないし。だから、お客さんが入らないんだよ。

絹代
伝次郎
子供にはわからないんだ。あの映画のよさが。
でも、ここまですらないと、上映すればするだけ損だよ。別の映画に差し替

てるみ えた方がいいんじゃない？
ゴジラかガメラにしようよ。怪獣映画なら、親子連れがいっぱい入るよ。

恵太 僕は寅さんが見たいです。なんか、親近感が湧いちゃって。

絹代 私は高倉健がいいね。一度でいいから、「絹代さん」て囁かれてみたいよ。

伝次郎 ウチは外国映画専門だ。

てるみ それはわかってるけど、テレビに対抗するためには、もっと派手な物をやらないと。

伝次郎 俺が映画を好きになったのは、若い頃に見たイタリア映画のおかげだ。日本

中の映画館が怪獣に征服されても、ウチだけは外国映画をやる。それが俺の信念だ。

おじいちゃんが見たイタリア映画って、何て題名？

てるみ 『忘れな草』だ。

絹代・伝次郎が去る。

五月十日夜、横須賀サクラ館の楽屋。敏郎がテーブルに突っ伏している。そこへ、恵太・てるみがやってくる。

てるみ どうしたの、敏君？ 体の具合でも悪いの？

敏郎 (体を起こして) いや、ただの居眠りだよ。昨夜遅くまで本を読んだから。

てるみ ねえねえ、敏君は『忘れな草』って映画、見たことある？ 昔のイタリア映画。

ないな。でも、忘れな草の伝説なら知ってるよ。

敏郎 伝説って？

敏郎

てるみ

敏郎

恵太

てるみ

恵太

てるみ

敏郎が去る。

十月十一日夜、横須賀サクラ館の事務所。絹代・伝次郎・稲子がテレビを見ている。そこへ、恵太・てるみがやってくる。

絹代

恵太

稲子

恵太

絹代

てるみ、何してるんだよ。早くこっちへ来なよ。

どうしたんですか？ 皆さん、お揃いで。

今朝、姉から電話があったんです。今夜の『パイハンター』に出るって。

『パイハンター』って？

知らないのかい？ 今、視聴率ナンバーワンのアクションドラマだよ。あの節子がたったの半年で、ここまで出世するとはね。

舞台は中世のドイツ。旅をしていた騎士がドナウ川の岸辺でキレイな青い花

を見つけた。彼はその花を恋人に持って帰ろうと思ひ、岸辺に降りた。が、

足を滑らせて、川に落ち、流されてしまう。彼はその花を岸辺に投げて、「

私を忘れないで！」と叫んだ。次の日、恋人はその花を彼の墓に供えた。そ

れ以来、その花は「忘れな草」と呼ばれるようになった。

え？ それでお願いします？ 騎士はお墓の中から蘇ったりしないの？

しない。恵太さん、また合言葉ですか？

（ノートパソコンのキイを叩きながら）うん。とにかく思いついた言葉を片

っ端から打ってるんだけど、いまだに正解が見つからない。

「忘れな草」は試してみた？

今、試したよ。でも、ほら。（ノートパソコンを示す）

（見て）まあ、おじさんが花の名前なんか合言葉にするわけないよね。

てるみ
恵太
伝次郎

私は絶対スターになるって信じてた。
(稲子に)『ピイハンター』の「ピイ」ってどういう意味ですか？
うるさい！ みんな、口を閉じろ！

別の場所に、柳葉・津川がやってくる。津川はアタッシュケースを持っている。

柳葉

一人で来るとは大した度胸だな。よし、アタッシュケースをよこせ。

津川

その前に、風間君の居場所を教えて。それが条件のはずよ。

柳葉

(拳銃を出して)女のくせに、偉そうな口を叩くな。

津川

(柳場の腕をつかんで)あらあら、ピイハンターを舐めてもらっちゃ困るわ。

柳葉

(津川の手を振り払って)何がピイハンターだ。言う通りにしないと、その控え目な胸に真っ赤な花が咲くことになるぞ。

そこへ、黒木がやってくる。拳銃を柳葉に向けている。

黒木

彼女に向かって、無礼な口はきかない方がいい。

津川

ボス、そいつは私に任せてください。ギタギタの目に遭わせてやります。

柳葉

クソーッ！

柳葉が津川に向かって、拳銃を撃つ。津川が避ける。そこへ、節子がやってくる。弾丸が胸に当たり、倒れる。柳葉が走り去る。黒木が後を追う。津川が節子に駆け寄る。

津川

(節子に)ごめんね。

津川が去る。節子も去る。

稲子　これだけ？

絹代　セリフが一つもないじゃないか。

てるみ　でも、ちゃんと顔がアップになったよ。お母さん、凄い。

伝次郎　なかなか真に迫ってた。いい演技だった。

恵太　で、「パイ」の意味は？

絹代・伝次郎・稲子が去る。

十月十二日昼、榎戸医院の診察室。榎戸が椅子に座り、梅坂がその横に立っている。そこへ、恵太・敏郎がやってくる。

榎戸　（梅坂に）あれ？　次はサクラ館の春山さんじゃなかったっけ？

梅坂　そうですよ。この人が春山さんです。

敏郎　（榎戸に）春山敏郎です。よろしくお願いします。

恵太　（榎戸に）彼は僕と同じ名字なんですよ。全くの偶然ですけど。

榎戸　そうでしたか。僕はてっきり、あなたの記憶が回復したのかと思っちゃって。

梅坂　（梅坂に）君が春山さんとしか言わないから。

私　（梅坂に）お仕事をしている最中に、倒れたんですよね？

恵太　そうです。本人は大丈夫だって言い張ったんですけど、最近ずっと体調が悪そうだったんで、僕が無理やり連れてきました。

榎戸
敏郎
（敏郎に）体調が崩れ始めたのはいつ頃からですか？
半年ほど前からです。でも、原因はわかってるんです。

榎戸
敏郎
何か持病があるんですか？
中学生の時に結核に罹って、右の肺を切除したんです。それからなるべく無理をしないようにしてきましたんですが、知らない間に疲れが溜まってたみたいで。

恵太
どうして言ってくれなかったんだ。言ってくれば、もっと気を遣ったのに。

榎戸
敏郎
気を遣われたくなかったからですよ。僕は病人じゃないんだ。

榎戸
敏郎
そうでしたか。でも、一応念のためにレントゲン写真を撮りましょう。梅坂君、準備をして。

梅坂
わかりました。（敏郎に）こちらへどうぞ。

榎戸・梅坂が去る。
横須賀サクラ館の前。恵太・敏郎がやってくる。

恵太
よかったな、結核が再発してなくて。

敏郎
だから、大丈夫だって言ったんですよ。でも、心配をかけて、申し訳ありませんでした。

恵太
いや、僕の方こそ、すまなかった。君が体調を崩したのは、僕がここに来たからだ。

敏郎
それは関係ないですよ。それより、お願いがあります。僕が片肺だったこと、サクラ館のみんなには黙っててくれますか。

恵太
気を遣われたくないからかい？

敏郎

恵太

僕はサクラ館が好きなんです。伝次郎さん、絹代さん、稲子さん、てるみちやんが好きなんです。みんなのためにも役に立ちたいんです。僕の名前が入ってなかったけど、まあいいか。わかった。二人だけの秘密にしておこう。

恵太・敏郎が去る。

一九七六年四月八日昼、横須賀サクラ館の事務所。伝次郎がテレビを見ている。そこへ、
 てるみがやってくる。

てるみ

おじいちゃん、何見てるの？

伝次郎

何でもない。(テレビのスイッチを押す)

てるみ

隠しても無駄。今の、お母さんが出たパイハンターの再放送でしょう？ 確
 か、五年前にやったやつだよ？

伝次郎

テレビを点けたら、たまたまやってたんだ。お茶。
 はーい。(お茶を淹れながら) 最近、テレビに出る回数が増えてきたよね。

てるみ

昨夜、お母さんから電話があつてね。来週、山口百恵の赤いシリーズに出る
 んだって。

伝次郎

今度は何が赤いんだ？

伝次郎

『赤い迷路』、『赤い疑惑』と来て、今度は『赤い運命』。
 どうせまた小さな脇役だろう。テレビで一番の女優なんて、夢のまた夢だな。
 でも、山口百恵と共演できるなんて、凄いよ。おじいちゃんだって、本当は
 うれしいくせに。

伝次郎

今日は学校はどうした。早退か？

てるみ

今日は一学期の始業式。私は三年B組だったよ。

伝次郎

てるみ

伝次郎
てるみ

あと一年で卒業か。おまえ、高校を出た後はどうするんだ。まさか、節子みたいになんて言わないだろうな？
私はお母さんみたいにはなれないよ。おじいちゃんがいいって言ってくれたら、ここで働きたい。で、なるべく早く結婚したい
おまえが結婚だと？ 笑わせるな。
私はもう十七だよ。女は十六を過ぎたら、結婚できるんだからね。

そこへ、絹代がやってくる。

絹代

てるみ

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

た
だ
い
ま
。

お帰り、おばあちゃん。どこへ行ってたの？

銀行だよ。(伝次郎に) あんた、ダメだったよ。

ダメって何が。

返済の猶予だよ。これ以上は伸ばせない。今週中に払い込みがなければ、こ

この土地を競売にかけるって。

支店長がそう言ったのか。

胡桃沢さんは先月いっぱい、別の支店に移ったんだって。今日会ったのは、

野茨って人だった。

だとしても、ウチのことは、胡桃沢から引き継ぎがあつたはずだ。胡桃沢は

俺の中学の後輩だ。サクラ館は絶対に守ると言ったんだ。

そんな話は聞いてないって。

野茨ってやつがそう言ったのか。

もし聞いていたとしても、支店長が交替したら、顧客との付き合い方も変わ

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

そこへ、恵太がやってくる。

恵太

てるみ

伝次郎

恵太

伝次郎

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

る。お宅様とのお付き合いは、これまでにしたいって。これまでにしたいだど？

何度頭を下げて、無駄だった。諦めるしかないよ。

わかった。俺が行ってくる。

（伝次郎の腕をつかんで）ダメダメ。あんたが行ったら、喧嘩になるに決ま

つて。放せ！

どうしました？

おじさん、おじいちゃんを止めて。

（恵太に）そこをどけ。

事情はよくわかりませんが、頭に血が上った状態で外に出るのはよくないで

す。ひとまず、椅子に座りましょう。お願いします。

クソッ。

帰り道に考えたんだけどね。私は野茨さんの言う通りにした方がいいと思う。

今、ここを売れば、その代金で借金が全部返せる。その上、少しだけど、お

金が残る。そのお金で、別の商売を始めればいいじゃないか。

この歳で何を。

鯛焼き屋はどうかね？ ほら、今、『およげ！たいやきくん』で歌が流行っ

てるだろう？

バカバカしいことを言うな！

伝次郎が走り去る。後を追って、恵太が走り去る。

てるみ
絹代

おばあちゃん、おじいちゃんに鯛焼き屋は無理だよ。
でも、ここはもうやっていけない。映画の時代は終わったんだ。とつくの昔に、テレビの時代になってたんだよ。

てるみ・絹代が去る。

横須賀サクラ館の前。伝次郎・恵太が走ってくる。恵太が伝次郎の腕をつかむ。

恵太

待ってください、伝次郎さん！

伝次郎

放せ！ 放さないで、ぶん殴るぞ！

恵太

とにかく一度、中に戻ってください！ お願いします！

車のクラクションの音。恵太が伝次郎を突き飛ばす。二人とも倒れる。恵太が地面で頭を打つ。車が走りすぎる音。伝次郎が起き上がり、恵太に駆け寄る。

伝次郎

恵太。恵太！

そこへ、てるみ・絹代がやってくる。

てるみ
伝次郎

どうしたの？ おじさん、車に轢かれちゃったの？
いや、すんでの所で避けた。怪我はしてないはずだ。

絹代　でも、転んだ拍子に頭を打ったかも。
てるみ　五年前と同じだ。おじさん、また記憶を失くしちやっただかも。
絹代　恵太君、しっかりして。

恵太が上半身を起こす。てるみ・絹代が叫ぶ。恵太が地面に座る。

伝次郎　恵太、おまえのおかげで命拾いをした。ありがとうよ。

絹代　（恵太に）なぜ黙ってるんだい。やっぱり、頭を打ったのかい？
てるみ　おじさん、ここはどこ？　あなたは誰？

恵太　：：クロノス・スパイラル。
てるみ　言うと思った。

てるみ・絹代が去る。

榎戸医院の診察室。榎戸が椅子に座り、梅坂がその横に立ち、話をしている。そこへ、恵太・伝次郎がやってくる。

榎戸　久しぶりですね、春山さん。その後、お変わりはありませんか？

伝次郎　あつたから、ここへ来たんだ。
梅坂　（榎戸に）私の話を聞いてなかったんですか？　春山さんは五年前と同じよ

うに、車に轢かれそうになって、地面で頭を打ったんです。
榎戸に）目が覚めてから、ほとんど口をきかない。何か聞くと、答えはい

つも、クロノス何とかだ。
また記憶が混乱してるんですかね。春山さん、私の顔を見てください。今か

らくつか質問しますから、よく考えて答えてください。まず、あなたのお名前は？

春山恵太です。

恵太 なんだ。(伝次郎に) 普通に答えられるじゃないですか。(恵太に) 今日は

何月何日ですか？

恵太 四月一日です。

梅坂 先生、今日は八日ですよ。

伝次郎 ということは、七日分の記憶を失ったってことかな？

梅坂 すまないな、恵太。俺を助けたおかげで、またこんなことになって。

恵太 結論を出すのはまだ早いですよ。(恵太に) 春山さん、あなたの現住所を教えてください。

梅坂 東京都新宿区中落合——

恵太 新宿？ 横須賀じゃなくて？

梅坂 (恵太に) あなたのご職業は？

恵太 去年までは鷺田大学理工学部の准教授でしたが、十二月に退職。今年の三月

から、P・フレックという会社に勤めています。

梅坂 P・フレック？ 確か、春山さんが持ってた社員証にあった名前ですよ。

伝次郎 (カルテを見て) ああ、カルテにもそう書いてある。ということは、七日じ

やなくて、五年分の記憶を失ったのかもしれない。

恵太 それじゃ、俺に会ったことも、ウチで働いたことも覚えてないのか？

伝次郎 春山さん、今は何年ですか？

恵太 何年？

伝次郎 年号ですよ。西暦何年ですか？ 一九七六年ですか？ それとも、一九七一

年号ですよ。西暦何年ですか？ 一九七六年ですか？ それとも、一九七一

恵太
梅坂
恵太

年ですか？
西暦二〇一〇年です。
二〇一〇年？
二〇一〇年四月一日、

僕はクロノス・スパイラルに乗った。

伝次郎・榎戸・梅坂が去る。

二〇一〇年四月一日朝、P・フレック開発四課の実験室。恵太が立ってくる。デイパツクを持って。そこへ、野方がやってくる。

野方　おはよう、春山君。いよいよ出発の日が来たな。荷物はそれだけか？

恵太　なるべく少なくしろって言ったのは、野方さんじゃないですか。

野方　荷物が増えれば増えるだけ、シートに使うエネルギーも増えるからな。で、中身は何だ。

恵太　着替えが三日分と、現金が百万円。お札は全部、三十九年前に使われていたものです。

野方　パソコンは？

恵太　もちろん、持ちましたよ。野方さんの言う通り、一九七一年から今日までの新聞記事を入れました。

野方　向こうへ着いたら、毎日、次の日の新聞を読むこと。そうすれば、事故や災害に巻き込まれずに済む。

恵太　それに、結果を知った上で馬券を買えば、確実に儲かる。

野方　君は競馬で生計を立てていくつもりか？

恵太　いや、いざって時だけです。仕事については、向こうに着いてから考えます。研究職には就かないのか。

恵太

僕にその資格はありません。それに、今の僕の知識で論文を書いたら、歴史が変わってしまいますよ。そうそう、これはお返ししておきますね。(社員証を差し出す)

野方

社員証か。それはそのまま持っていてくれ。

恵太

でも、P・フレックつて、三十九年前はありませんでしたよね？

野方

ああ。しかし、君には我が社の人間として、スパイラルに乗ってほしいんだ。

恵太

わかりました。それにしても、若月さん、遅いですね。

野方

彼女ならとっくに來てる。今、スパイラルの最終チェックをしてるんだ。

シャツターが上がって、奥のクロノス・スパイラルが姿を現す。スパイラルから、若月が降りてくる。ノートパソコンを持っている。

恵太

おはようございます、若月さん。

若月

おはよう。スパイラルの準備は万端。エネルギーも百パーセント充填した。

恵太

あなたはちゃんと朝御飯を食べてきた？

若月

ええ。三十九年前へ行くって決めてから、食欲が凄いですよ。でも、エネルギーのことを考えて、今日は控え目にしました。

恵太

あなたはこの実験が百パーセント成功すると思ってるみたいね。

若月

若月さんが書いた論文と、これまでの実験レポートを読んで、確信しました。

野方

僕は間違はなく三十九年前へ行けます。

野方

行っただけでは成功とは言えない。君には三十九年間、生き延びてほしい。

野方

そして、二〇一〇年四月一日に、ここへ戻ってきてほしい。

若月 惠太 若月 惠太 若月 惠太 野方 惠太 若月 惠太 若月 惠太 野方 若月 野方 若月 惠太 若月 惠太

わかっています。必ず戻ってくると約束します。

その時、あなたはいくつになつてゐる？

今が三十三だから、七十二です。

正直に言うのと、私にはあなたの気持ちがわからない。どうして過去なんかに行きたがるのか。

それはスパイラルの力を証明するためだ。

野方さんは彼の言葉を本気にしたんですか？

彼には彼の事情があるんだ。俺たちが詮索するべきじゃない。

でも、過去へ行くということは、今、自分が手にしているものをすべて捨てるということなんです。私には自殺行為としか思えません。

自殺行為か。確かにそうもありません。

春山君。

一月に母が亡くなった時、僕は生きる気力を失くしました。母は自分の幸せを捨てて、僕を育ててくれた。それなのに、僕は何の恩返しもしなかった。

僕には僕が許せなかった。

お母さんは恩返しなんか期待してなかったんじゃないか？

もちろんそうです。でも、僕の気持ちは違う。僕は母を幸せにしたかった。

わかった。あなたは自分を罰したいのね？ それで、すべてを捨てて過去へ。

僕はそこまでいい人間じゃないですよ。

じゃ、どうして。

お二人には笑われるかもしれないけど、正直に言います。僕は母に会いたい

んです。三十九年前に行けば、若い頃の母に会える。

会つてどうするの？ 僕は未来からやってきた、あなたの息子ですつて言う

の？

恵太 そんなことはしません。遠くから見つめるだけでいいんです。

若月 本心にそれだけ？ あなたはお母さんの過去を変えるつもりじゃないの？

野方 (恵太に) それはダメだ。三十九年前、君はまだ生まれてない。下手をした

たら、君の人生は全く別のものになってしまう。

若月 (恵太に) それだけじゃない。最悪の場合、あなたは生まれてこなくなる。

恵太 つまり、自殺できるってわけですね？

若月 約束して。お母さんの人生に影響を与えないって。

恵太 言ったでしょう？ 僕は母の顔が見られれば、それでいいんです。おかしな

真似は絶対にしません。

野方 それを聞いて、安心した。じゃ、そろそろ実験を開始するか。

恵太 若月さん、野方さん、今日までいろいろお世話になりました。三十九年後に

また会いましょう。

野方 いや、俺たちはこれから玄関へ行って、七十二歳の君がやってくるのを待つ。

恵太 そうでしたね。じゃ、五分後に会いましょう。

若月 若月君、スパイラルを起動させてくれ。春山君、君はセルに入ってくれ。

恵太がクロノス・スパイラルのセルに入る。

若月 目標時刻は一九七一年四月一日午前八時。

野方 よし、カウントダウンだ。

若月 五、四、三、二、一。(キイを叩く)

クロノス・スパイラルが回転を始める。そして、眩しく光り、轟音を発し、煙を噴き出す。煙の中から、恵太が飛び出す。そこへ、他の登場人物たちがやってくる。恵太が過去に目撃した様々な場面を逆回転で演じる。その中を、恵太がさまよう。やがて、恵太以外の登場人物たちが去る。

一九七六年四月八日夕、榎戸医院の病室。恵太がベッドに座っている。そこへ、てるみ・絹代がやってくる。てるみはノートパソコンを持っている。

てるみ

おじさん、大丈夫？

恵太

心配をかけて、すまなかったね。でも、頭の方はすっかり落ち着いた。おじいちゃんから聞いたよ。おじさん、今は西暦二〇一〇年だって言ったんだって？

恵太

ああ。でも、すぐに正しい年号を思い出した。今は一九七六年だ。

絹代

じゃ、どうして二〇一〇年だって言ったんだい。

恵太

実を言うと、僕は五年前に横須賀へ来るまで、東京の劇団で役者をしてたんです。その時、練習してたのが、二〇一〇年を舞台にしたSFもので。

絹代

おじさん、役者だったの？ テレビに出たことはある？

恵太

ない。僕は舞台専門だったから。

絹代

ええ。僕は春山恵太。生まれも育ちも、東京都新宿です。

恵太

ご家族は？

てるみ

いません。父も母も亡くなって、僕は一人暮らしをしていました。だから、搜索願が出てなかったんだ。

絹代

（恵太に）でも、あんたは劇団にいたんだろう？ あんたがいなくなつて、劇団の人たちは心配しなかつたのかねえ。

恵太

てるみ

僕は下つぱでしたから。

恵太

絹代

恵太

絹代

恵太

絹代

てるみ

絹代

そこへ、梅坂がやってくる。

梅坂

絹代

てるみ

絹代

てるみ

どうかしましたか？

この子が急に目眩を起こして。

大丈夫。もう何ともない。

でも、あんた、最近、食欲がないじゃないか。一度、先生に診てもらった方がいいよ。

本当に大丈夫。私、家へ帰って寝る。

梅坂
てるみ

診るだけなら、五分で済むよ。私と一緒に来て。
でも。

絹代

あんたにもしものがあつたら、節子に申し訳が立たないよ。いいから、
梅坂さんの言う通りにしなさい。恵太君、また後でね。

てるみ・絹代・梅坂が去る。

恵太

(ノートパソコンを開いて) 合言葉は「忘れな草」。(キイを叩きながら)
英語で f、o、r、g、e、t、m、e、n、o、t。「forget」だ。

恵太が去る。

四月八日夕、榎戸医院の診察室。てるみが椅子に座り、絹代がその横に立っている。そこへ、榎戸・梅坂がやってくる。

榎戸 お待たせして、すみません。検査に時間がかかったもので。

絹代 先生、こんな大袈裟なことになるとは思ってませんでしたよ。この子はただの風邪じゃないんですか？

榎戸 違います。てるみさんは妊娠しています。

絹代 今、何て言いました？ 妊娠？

榎戸 そうです。現在、妊娠二カ月と推定されます。ですので、出産予定日は今年の十二月の上旬ということになります。

絹代 それは何かの間違いじゃないですか？ だって、この子はまだ高校生ですよ。尿検査の結果が陽性でした。(てるみに) 月経も先月からないんだよね？

榎戸 (うなづく)

絹代 (絹代に) 僕は産婦人科は専門外ですが、間違いないと思います。

梅坂 そうですか。この子が妊娠を。

絹代 さん、大丈夫ですか？

いや、危うく気を失うところでした。申し訳ありませんが、お酒を一杯、いただけますか？

梅坂
絹代

榎戸

てるみ

榎戸

てるみ

榎戸

てるみ

絹代

てるみ・絹代が去る。

梅坂
榎戸
梅坂
榎戸

ここには消毒用のエタノールしかありません。
そうでしょうねえ。(榎戸に)この子の母親は二十歳の時にこの子を産んだ
んですけど、その時よりもっとビックリしました。(てるみに)まさか、お
まえが節子の上を行くとはね。
十代での妊娠は流産や早産の確率が高い。母体そのものにも危険がある。今
後は産婦人科の専門医に診てもらおうことをお勧めします。
あの。
何だい？
私、産んでもいいんですか？
それは君と、君のご家族が決めることだ。でも、僕は医者なんでね。せつか
く宿った命なんだから、大事にしてほしいと思う。あと、君自身の体もね。
(うなづく)
(榎戸に)何はともあれ、お世話になりました。てるみ、行くよ。

榎戸・梅坂が去る。

てるみちゃん本人も気づいてなかったみたいですね。
あの年頃は、生理が不安定だからな。おなかも全然大きくなってないし。
てるみちゃん、産むでしょうか？
産むにしても産まないにしても、これからが大変だ。僕はあの子が赤ん坊の
頃から知ってるからね。幸せになってほしいよ。

四月八日夜、横須賀サクラ館の事務所。てるみ・絹代・伝次郎が椅子に座っている。そこへ、稲子がやってくる。

稲子

お客さん、みんな帰ったよ。と言っても、六人しかいなかったけど。

絹代

済まなかったね。急に仕事を頼んじゃって。

稲子

別にいいよ。私も今日は始業式だけだったし。で、てるみは吐いたの？

絹代

その言い方はやめなよ。まるでこの子が刑事ドラマの犯人みたいじゃないか。

稲子

でも、実際、不純異性交遊って罪を犯したわけでしょう？

伝次郎

稲子、茶化すのはやめろ。

稲子

はいはい。ねえ、てるみ。いい加減、腹を決めて、しゃべっちゃえば？ お

じいちゃんだって、鬼じゃないんだから、相手の男を捕まえて、ボコボコにしたりはしないとと思うよ。

伝次郎

それは向こうの出次第だ。

絹代

同じ高校の子だってことは間違いないと思うんだ。それ以外に友達はいない

伝次郎

し、この子はアルバイトもしてないし。

絹代

そうか、教師か。相手は教師なんだな？

稲子

（てるみに）まさかと思うけど、妻子持ち？ だとしたら、節子の時とまる

つきり同じじゃないか。

てるみ

私はお母さんと同じことはしない。

伝次郎

じゃ、一体誰なんだ。

てるみ

言いたくない。

絹代

意地っ張りな所も節子にそっくり。稲子、あんたに心当たりはないのかい？

稲子

全然。こうなったら、敏君にも聞いてみたら？

伝次郎
稲子

ダメだ。身内の恥を晒すわけにはいかない。
でも、てるみはしよっちゅう楽屋に入り浸ってるじゃない。敏君なら、何か知ってるかもよ。行ってくる。

稲子が去る。

伝次郎
絹代

おい、稲子！
まあ、いいじゃないの。あの子はウチに十年以上いるんだし。相談に乗って
もらおうよ。

伝次郎
絹代

あいつがウチに来て、もうそんなになるのか。
十八の時に来たんだから、もう十一年だよ。安月給なのに、文句も言わずに
働いてくれて。あんないい子、なかなかいないよ。

伝次郎
絹代

あいつのこれからのことも考えてやらないとな。
それじゃ、決めたの？ ここを売って。

伝次郎
てるみ
絹代

ないものは払えない。だとしたら、腹を括るしかないだろう。
おじいちゃん、映画館をやめるの？
今まで持ったのが奇跡なんだよ。本当だったら、何年も前に潰れていたはず
なんだ。

てるみ
伝次郎

でも、おじいちゃんはまだやめたくないんでしょう？
当たり前だ。しかし、世の中にはどうしようもないことがあるんだ。

そこへ、稲子・敏郎がやってくる。

稲子
絹代

敏郎
絹代
敏郎

絹代
伝次郎

敏郎
伝次郎

てるみ
伝次郎

敏郎

伝次郎

稲子
伝次郎

稲子

伝次郎

連れてきたよ。事情は私から説明しておいた。

(敏郎に) 急な話でビックリしただろうけど、産婦人科の先生も間違いないって言ってた。それなのに、この子は相手の名前を言わない。それで、あなたに何か心当たりはないかと思ってるね。

相手は僕です。

何だって？

てるみちゃんのお腹の子の父親は僕です。勝手なことをして、申し訳ありませんでした。(頭を下げる)

そんな。よりにもよって、あんたが？

(敏郎に) 頭を下げてただけで許されると思ってるのか？

思ってたません。殴られても蹴られても、仕方ないと思ってます。

おまえを殴っても、てるみの体は元に戻らない。出ていけ。

おじいちゃん！

(敏郎に) 荷物をまとめて出ていけ。今すぐだ。

てるみちゃんを残して、出ていくわけにはいきません。お願いします。てるみちゃんと結婚させてください。(頭を下げる)

おまえなんかにてるみをやれると思うか？

ちよつと待ってよ、お父さん。

おまえは口出しするな。

そう言わずに、私の話を聞いて。敏君は自分がしたこと責任を取って言うてるのよ。男として、立派じゃない。それなのに、いきなりここから追

出すなんて、あまりに乱暴すぎると思う。立派な男が高校生に手を出すか？

稲子
てるみ
絹代
稲子
絹代
稲子
稲子
稲子
敏郎
伝次郎
敏郎
伝次郎
敏郎
伝次郎
てるみ
伝次郎
稲子

それは逆よ。先に好きになつたのはてるみの方。そうだよ、てるみ？
(うなづく)

(稲子に) それじゃ、あんたは知つてたのかい？ この二人が深い仲だつてこと。

一緒に暮らしてゐるんだもん。気づかないわけないよ。

あんたは高校の先生だろ？ なぜてるみを止めなかつたんだい。

だつて、てるみは真剣だつたもの。(てるみに) 小学生の頃からずっと好き

だつたんだよ、ね？

(うなづく)

(伝次郎に) 敏君もてるみのことを真剣に考えてる。だから、結婚させてほしいつて言つたのよ。私からもお願いします。二人のこと、認めてあげてく

ださい。

それで、てるみが幸せになれると思うか？

幸せにしてみせます。何が何でも。

そう思うなら、なぜてるみが高校を出るまで待たなかつた。俺は結婚は絶対

に認めない。おまえの顔は二度と見たくない。

でも、僕はお腹の子の父親なんです。

心配するな。子供は処置する。

おじいちゃん、私、イヤだ。

おまえはまだ十七だ。母親になるには早すぎる。

そんなことない。私にだつて、子供を育てられる。

おまえの母親を見てみる。二十歳でおまえを産んで、その後はずっとほつたらかした。あいつは母親になれなかつた。おまえだつて、同じだ。

てるみが走り去る。

絹代

てるみ！　どこへ行くんだい！

稲子

お父さん、今のはいくら何でもひどすぎる。てるみと姉さんを一緒にしないで。てるみはまだ若いけど、敏君とだったら、きつとうまくやっていける。

伝次郎

なぜそんなことがわかる。

稲子

お父さんだって、敏君の人柄はよく知ってるでしょう？　私だって、相手が

伝次郎

てるみの同級生だったら賛成しなかった。でも、敏君なら。

敏郎

本当に申し訳ありませんでした。（頭を下げる）

絹代

（伝次郎に）今夜はもう遅いし。出ていくのは明日でいいだろう？

伝次郎

そうだな。

絹代

（敏郎に）てるみのことは心配しなくていいよ。私たちが何とかするから。

稲子・敏郎が去る。

四月八日夜、横須賀サクラ館の楽屋。恵太が椅子に座って、ノートパソコンを見ている。そこへ、絹代・伝次郎がやってくる。

1
1

絹代

恵太

伝次郎

恵太

絹代

恵太

絹代

恵太

絹代

恵太

絹代

恵太

伝次郎

絹代

あれ？ あんた、帰ってたのかい？

ええ。お蔭様で記憶が回復しましたし、特に怪我もしてないんで。

敏郎はどこだ。

さあ。銭湯にでも行ったんじゃないですか？ 僕がここへ戻ってきた時には、

いませんでしたよ。

榆の湯の営業は十一時までだよ。もう十五分も過ぎてるよ。

帰りに寄り道でもしてるのかな。よかつたら、探してきましょうか？

（伝次郎に）あんた、間違いないよ。

間違いないって何が？

てるみと二人で出ていったんだよ。私たちに黙って。

でも、てるみちゃんの家にはお風呂がある。わざわざ銭湯へ行く必要はない

でしょう。

俺たちは銭湯の話をしてるんじゃない。

（恵太に）あの二人はどこか遠くへ行ったんだ。もうここには戻らないつもりで。

恵太 それはつまり、駆け落ちしたってことですか？ いや、それは何かの間違いでしよう。そんな話はお袋から聞いてません。
お袋？ なんてあんたのお袋さんがここに出てくるんだい。
いや、それはつまり。

そこへ、稲子がやってくる。

稲子 やっぱりいなかった？
伝次郎 おまえの方は。
稲子 友達の家には行ってなかった。電話もかかってこなかったって。
伝次郎 (絹代に) 敏郎の実家の電話番号は。
絹代 事務所に行けばわかる。私、行ってくる。
稲子 敏君の家なら、私がかけたよ。でも、答えは同じ。当たり前だよ。そんな所へ行ったら、すぐに連れ戻されるに決まってるもの。
絹代 じゃ、他に行きそうな所は？
稲子 敏君の友達なんて、一人も知らないし。もう手の打ちようがないね。
恵太 二人はなぜ駆け落ちしたんですか？
稲子 (伝次郎に) 私が話していい？
絹代 私か話すよ。(恵太に) 実は、あの二人が深い仲だってことがわかってね。
稲子 敏郎君は結婚させてくれって言ったんだけど、この人が反対したんだよ。
恵太 それだけじゃないでしょ？ (伝次郎に) 出ていけって言ったよね？
稲子 それで二人は思い余って？ どういうことだ。お袋の話と全然違う。
お袋？

恵太 何でもありません。それより、てるみちゃんの方が心配です。（絹代に）昼

間、榎戸医院で目眩を起こしましたよね？

絹代 あの子は今、婦人科の病気に罹ってるんだよ。榎戸先生にも無理をするなつて言われたんだ。

恵太 だったら、すぐに追いかけた方がいい。

稲子 でも、私たちには行き先がわからないのよ。

恵太 僕に一つだけ心当たりがあります。敏郎君の友達の勤め先です。そこへ行つ

たのは、もう五年も前ですけど。

伝次郎 いいから、案内してくれ。

恵太 いや、伝次郎さんはここで待っていてください。僕が必ず連れ戻しますから。

稲子 私も行くと。恵太さんだけに任せておくわけにはいかないもの。

絹代・伝次郎が去る。
馬車道ホテルのフロント。純子が立っている。そこへ、恵太・稲子がやってくる。

純子 （恵太に）いらっしやいませ。ご予約ですか？

恵太 いや、僕は客じゃありません。こちらにお勤めの栗崎さんに用があつて来た

んです。

純子 ひよつとして、前にもここにいらっしやいませでしたか？

恵太 ええ、五年ほど前に。

純子 その時は確か、記憶を失くされたつて。

恵太 お蔭様で全部思い出しました。その節はいろいろお世話になりました。

稲子 （純子に）そんなことより、栗崎さんは？

純子 今、ちよつと席を外してます。すぐに戻ると思いますが。

そこへ、檜原がやってくる。修理道具を持っている。

檜原 純子さん、五階のエレベーターホールのライト、直しておきました。
純子 ご苦労様。ねえねえ、この人のこと、覚えてる？ 五年前に、「僕のこと、

純子 覚えてます。春山恵太さんでしたよね？

檜原 凄いな、名前まで覚えてたの？

純子 そんなことより、栗崎さんは？

純子 そうでしたそうでした。檜原君、栗崎君は見なかった？ ついさつきまで、

純子 ここにいたんだけど、姿が見えなくなっちゃって。

檜原 いや、僕は知りません。

純子 じゃ、私たちが来る前に、春山敏郎って人が訪ねてきませんでしたか？ 栗

純子 崎さんに会いに。

恵太 (檜原に) その人は高校生の女の子を連れていたはずなんです。二人は五年

前にもここに来ました。僕と一緒に。

恵太 その人たちのことも覚えてますが、今日はお会いしてません。

恵太 どうか、本当のことを言ってください、秋沢さん。

純子 違いますよ。その人の名前は檜原です。

檜原が修理道具を恵太の足の上に落とす。恵太が叫んで、跪く。

榎原 すみません。お怪我はありませんか？ 向こうの椅子に座って、靴を脱いで
ください。手当てをしますから。

榎原が恵太を椅子に連れていき、座らせる。

榎原 記憶が回復したんですね？
恵太 ほんの十二時間前に。あなたはP・フレック開発四課の秋沢里志さんですよ

榎原 ね？ 僕はこの時代に、ノートパソコンを持ってきたんです。その中に、ス
パイラルの実験レポートが入って、あなたの写真が。

榎原 あなたもクロノス・スパイラルに乗ってきたんですか？
恵太 ええ。あなたが乗った半年後の、二〇一〇年四月に。

榎原 そうじゃないかと思っただけです。あなたは五年前にここへ来た時、P・フ
レックを探してましたよね？

榎原 記憶を失くして、P・フレックの社員証だけが頼りだったんで。
恵太 あの会社ができるのは一九八六年。今から十年後ですよ。そんなことより、

榎原 あなたはなぜ春山敏郎という人を探してるんですか？
恵太 彼は僕が勤めている映画館の同僚なんです。その館主のお孫さんと駆け

榎原 落ちしてしまっただけです。おそらくは僕のせいだ。

榎原 あなたが頭を打って、病院へ行ったせいで、彼女の妊娠が発覚した。敏郎君は結
婚させてほしいと言ったけど、館主は許さなかった。

榎原 あなたは、歴史が変わってしまったんですか？
恵太 そうです。変わる前は、駆け落ちなんてしなかった。二人は館主の許しを得

榎原

恵太

榎原

恵太

榎原

恵太

榎原

恵太

榎原

恵太

恵太

純子が去る。

馬車道ホテルの宿直室。栗崎が椅子に座り、日誌を書いている。そこへ、恵太・稲子・榎原がやってくる。

榎原

栗崎

稲子

栗崎

栗崎さん、さっきの二人はどこにいますか？

帰りましたよ。たった今。

二人はどこへ行きましたか？ 行き先を教えてください。

あなたは？

て、横須賀で結婚式を挙げたんです。なぜ変わったんだろう。

たぶん、妊娠の発覚が早すぎたんです。発覚の仕方もよくなかった。

その二人はもしかして。

そうです。僕の父と母です。

あなたのご両親に会うために、この時代へ来たんですか？

いいえ。歴史を変えて、母を前より幸せにしようと思ってきました。それなのに、僕のせいで、悪い方へと変わってしまった。このままにしておくわけに

はいかないんです。

春山さん、二人は三十分ほど前に、ここへ来ました。

本当ですか？

そして、栗崎君と一緒に地下へ行きました。たぶん、宿直室に。三人は今も

そこにいると思います。

ありがとうございます、秋沢さん。稲子さん、ついてきてください。

稲子

栗崎

恵太

栗崎

恵太

栗崎

恵太

栗崎

恵太

榎原

恵太

栗崎・榎原が去る。
関内駅のホーム。恵太・稲子がやってくる。反対側から、てるみ・敏郎がやってくる。

稲子

てるみ

稲子

てるみ

稲子

吉野てるみの叔母です。てるみはまだ高校生なんです。今すぐ連れ戻さないと、大騒ぎになります。

しかし、敏郎は誰にも言うなっていました。

僕らはてるみちゃんのを心配してるんだ。頼むから教えてくれ。

敏郎を裏切るわけには行きません。

彼女のお腹には赤ちゃんがいる。君はそれを知ってて、言ってるのか？

その話は本当ですか？

本当だ。だから、いま、彼女に無理をさせるわけにはいかないんだ。

二人は盛岡へ行きました。そこに、僕の母の実家があるので。

(恵太に)それなら、まずは関内駅へ向かったはずだ。

栗崎君、ありがとう。秋沢さん、あなたにもお礼を言います。

困った時はまたいつでも来てください。それより、早く追いかけないと。
稲子さん。

てるみ。

どうしてここがわかったの？

そんなことはどうでもいい。私と一緒に家に帰って。

いやだ。

敏君、てるみはまだ未成年なのよ。未成年の結婚には保護者の承認が必要なの。承認なしに家から連れ出したら、誘拐罪になるのよ。

惠太 てるみ

敏君を責めないで。家を出ようって言出したのは私なんだから。君は普通の体じゃない。無理をしたら、赤ちゃんだけじゃなくて、君自身の命も危なくなる。

稲子 てるみ

(稲子に) 話したの？

惠太

話してない。でも、どういうわけか、この人は知ってたの。

稲子

(てるみに) とにかく、君たちをこのまま行かせるわけにはいかない。僕と一緒に帰るんだ。

てるみ

帰ったら、敏君と二度と会えなくなる。

惠太

敏郎君も一緒に連れていく。二人でもう一度、伝次郎さんに頼むんだ。結婚させてほしいって。

敏郎

無駄ですよ。許してくれるわけありません。

稲子

てるみのことが本気で好きなら、てるみの幸せを考えて。

敏郎

伝次郎さんは子供を処置すると言いました。それで、てるみちゃんが幸せになれると思いますか？

稲子

でも、あなたたちだけで、子供が育てられる？

てるみ

育ててみせる。幸せになつてみせる。

惠太

口で言うのは簡単だよ。でも、子供を育てるのは本当に大変なことなんだ。小さいうちはすぐに病気になる。学校へ通い始めると、今度は怪我だ。お菓

子

子、オモチヤ、洋服、自転車。次から次へと物をほしがる。注意をしたら、口

答え

口答え。どんなに世話を焼いてあげても、ありがとうの一つも言わない。子供

供

供っていうのは、親のことなんか何も考えない。自分勝手な生き物なんだ。

それ

それじゃ、惠太さんも産まない方がいいって言うんですか？

少なく

少なくとも、このまま盛岡へ行つて、二人で子供を育てるよりはいいと思う。

も

少なくて、このまま盛岡へ行つて、二人で子供を育てるよりはいいと思う。

惠太

少なくて、このまま盛岡へ行つて、二人で子供を育てるよりはいいと思う。

敏郎

少なくて、このまま盛岡へ行つて、二人で子供を育てるよりはいいと思う。

惠太

少なくて、このまま盛岡へ行つて、二人で子供を育てるよりはいいと思う。

てるみ
恵太 そんなの、やってみなくちゃわからないじゃない。
いや、僕にはわかる。子供は君の重荷になる。子供のせいで、君は幸せにな
れないんだ。

てるみ そんなことない。敏君さえ一緒にいてくれれば。

恵太 敏郎君にもしものことがあつたら、君一人で育てなければならぬんだよ。
私一人でも育てる。育てる。

敏郎 (恵太に) てるみちゃんを一人にはしません。僕は死ぬまでてるみちゃんの
そばにいます。

恵太 ああ、もう、わかった。君たちの思う通りにすればいい。僕は全力で応援す
る。

稲子 恵太さん、何を言い出すのよ。
恵太 (てるみに) そのかわり、今のセリフを伝次郎さんに言うんだ。胸を張って、
堂々と。

横須賀サクラ館の前。恵太・てるみ・稲子・敏郎がやってくる。反対側から、絹代・伝
次郎・節子がやってくる。

節子 てるみ！

てるみ お母さん、どうしてここにいるの？

絹代 私が電話で知らせたんだよ。

てるみ (節子に) でも、仕事は？

節子 ドラマの撮影中だったけど、そんなことはどうでもいいの。あんたって子は
何をしてくれたの！(てるみの腕をつかむ)

恵太
節子
てるみ

敏郎

節子
絹代

てるみ

節子

てるみ

節子

てるみ
節子
てるみ

節子さん、怒らないで、てるみちゃんの話聞いてやってください。

あなたは口を挟まないで！

お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、心配をかけて、ごめんさい。私
はもうどこにも逃げません。だから、話を聞いてください。（頭を下げる）

（節子に）僕からも謝ります。（頭を下げて）だから、どうか、てるみちゃん
の話をして。

今更謝っても、遅いのよ。

待ちなよ、節子。てるみもこうして頭を下げて頼んでるんだから、聞くだけ
聞いてあげようよ。

私はまだ十七です。お母さんたちから見れば、子供に見えるかもしれませんが。
でも、自分のしたこと責任は取ります。どうか、私に産ませてください。

高校はどうするの。その後は。今、産んだら、あなたの将来はメチャクチャ
になるのよ。

どうしてみんなそうやって決めつけるの？

あんたって子はどこまで間抜けなんだろう。そんなの、私を見ればわかるで
しょ？ あんたを産んだおかげで、何もかもが一からやり直しになった。自

分のことで精一杯で、あんたを育てる余裕なんかなくなった。ずっと別々に
暮らして、あんたに辛い思いをさせた。

私は辛くなんかなかったよ。

嘘をつくんじゃないの。私にはおじいちゃんとおはあちゃんがいた。稲ちや
んと敏君もいた。お母さんはいなかったけど、東京で一人で頑張ってた。お

母さんがテレビに出るとうれしかった。辛いなんて思ったこと、一度もない

節子

てるみ

伝次郎

てるみ

節子

稲子

節子

絹代

伝次郎

絹代

伝次郎

敏郎

よ。
てるみ。

私は今まで幸せだった。これからも幸せになる。お願いだから、私を信じて。ここまで勝手なことをしておいて、今更信じられると思うか。

それでも信じてほしい。お願いします。(頭を下げる)

(伝次郎に) 私からもお願いします。てるみを信じてやってください。

姉さん。

お願いします。お父さん。(頭を下げる)

(伝次郎に) あんた。

おまえたちの気持ちはよくわかった。

それじゃ、てるみと敏郎君のこと、認めてやるんだね？

誰がそんなことを言った。俺はわかったと言ったんだ。これからどうするか

はじっくり考えてから決める。今夜はもう遅い。みんなさっさと寝ろ。敏郎、

おまえもだ。

ありがとうございます。

恵太・てるみ・絹代・伝次郎・節子・稲子・敏郎が去る。

二〇一〇年四月一日朝、P・フレック開発四課の実験室。若月・野方が立っている。シヤッターが上がり、クロノス・スパイラルが回転を始める。そして、眩しく光り、轟音を発し、煙を噴き出す。

野方 おめでとう、若月君。実験は成功だ。

若月 念のために、確認を行います。

野方 その必要はない。春山君は間違いなく、三十九年に行った。俺が保証する。

若月 (セルを中を見て) セルの中は空です。残留物は何もありません。

野方 ほら、見ろ。

若月 (ノートパソコンのキイを叩きながら) スパイラル本体にも故障はありません。

野方 俺の言った通りじゃないか。君のスパイラルはついに完成した。少しは喜んだらどうだ。

若月 でも、春山君が三十九年前に到達したかどうかはまだわかりません。

野方 いや、彼は間違いなく到達した。俺にはわかる。

若月 どうしてですか？

野方 今から十五年前の話だ。俺は大学院の二年目で、お世話になっていた教授のお供をして、ニューヨークへ行った。国際シンポジウムに出席するために。

野方

野方

野方

野方

野方

野方

野方

その時、レセプションで、日系人の教授に会った。その教授は、時間軸圧縮理論を研究するチームのリーダーだった。歳は六十過ぎだったが、顔が春山君にそっくりだった。

若月
野方

まさか。
その人の語る理論は実に魅力的だった。俺はその場で決めたんだ。彼の理論を使って、物質を過去に飛ばす機械を作ろうと。そうして作り上げたのが、クロノス・ジョウンターだ。

若月

つまり、春山君は三十九年前に到達した後、アメリカへ渡って、教授になっ

野方

たってことですか？
ただの教授じゃない。クロノス・ジョウンターの生みの親だ。

若月

それで、面接の時、彼の顔を見ただけで、合格って言ったんですね？

野方

十五年前に会ったあの人がだすぐに気づいた。ただし、その時の彼は春山恵

若月

太という名前じゃなかったが。

野方

何て名前だったんてすか？
それは直接、本人に聞くといい。昔話はこれくらいにして、玄関へ行こう。彼を待たせちゃ悪い。

若月・野方が去る。

四月三十日夜、横須賀サクラ館の事務所。てるみ・絹代・伝次郎が椅子に座って、話をしている。そこへ、恵太・稲子がやってくる。てるみがお茶を淹れる。

稲子
絹代

お客さん、みんな帰ったよ。と言っても、三人しかいなかったけど。
最後の日だっていうのに、寂しいね。

伝次郎

絹代

てるみ

絹代

伝次郎

稲子

伝次郎

稲子

恵太

稲子

恵太

絹代

馴染のお客さんは昼間来てくれた。みんな、残念だと言ってくれた。

だって、三十年も続けてきたんだもの。

三十って言ったら、稲ちゃんの歳と同じだね。

そうそう。ここを始めた時、稲子は私のお腹の中にいたんだ。

最初に上映したのが、ビング・クロスビーの『我が道を往く』だった。「俺

も我が道を行くぞ」と思ったもんだ。

行ったじゃない。三十年も。

俺にとつてはあつと言う間だった。まるで、浦島太郎が玉手箱を開けた時の

気分だ。気がついたら、ジジイだった。

この建物はすぐに取り壊されてしまうんですか？

工事は来月からだって。後には倉庫ができるって話。

倉庫？

住島重工って会社がこの辺りの土地を買い占めたんだよ。で、今ある建物を

全部壊して、倉庫にするんだって。

そこへ、敏郎がやってくる。

敏郎

恵太

敏郎

稲子

恵太

稲子

皆さん、上映の準備ができました。

フィルムの状態はどうだった？ かなり傷んでるって聞いたんだけど。

試しに最初の方だけ映してみたけど、大丈夫そうでしたよ。

（恵太に）ねえねえ、最後にみんなに見せたい映画って何なの？

それは伝次郎さんに聞いてください。

教えてよ、お父さん。

伝次郎
てるみ
絹代

一九三五年のイタリア映画、『忘れな草』だ。
それって、おじいちゃんが若い頃に見て、好きになった映画？
この人、見終わってすぐに、「決めた。俺は映画館を作る」って言ったんだ
よ。

てるみ

絹代

恵太

それじゃ、おばあちゃんも一緒に見たの？ ということはデート？
私にだって、恋に胸をときめかせる時代はあったんだよ。

稲子

恵太

稲子

伝次郎

てるみ

伝次郎

てるみ

伝次郎

てるみ

伝次郎

てるみ

伝次郎

絹代

絹代

（てるみに）ここで最後に上映する映画はそれしかないと思って、知り合い
に頼んで、探してもらったんだ。そうしたら、外国映画の配給会社の倉庫で
見つかって、一日だけ借りることができた。
その知り合いって、馬車道ホテルの檜原さん？
よくわかりましたね。

だって、あの人、言ってたじゃない。困った時はいつでも来てくださいって。
じゃ、そろそろ上映を始めるか。

その前に一つだけ教えて。どうしておじいちゃんはこれから見る映画が好き
になったの？

映画の中で主役の男が歌を歌うんだ。「私を忘れないで」と。

その歌が気に入ったの？

気に入ったんじゃないかって、「ああ、これが映画だ」と思ったんだ。人はなぜ
映画を作るのか。それはたぶん、忘れてほしくないからだ。

何を？

さあ、何だろうな。

（てるみに）さあさあ、客席に行くよ。敏君、映写は任せたからね。

伝次郎・絹代・稲子・敏郎が去る。

惠太　　てるみちゃん、引越し先は決まったの？
てるみ　うん。敏君が勤める映画館が新宿にあるんで、近くにアパートを借りた。中

惠太　　そうか。よかった。

てるみ　おじさんはこれからどうするの？　前任んでた家へ戻るの？

惠太　　いや、そこには別の人が住むことになってね。とえあえず、知り合いの家に

居候することにした。

てるみ　そう。でも、また会えるよね？

惠太　　もちろんだよ。ねえ、てるみちゃん、これからいろいろ大変なことがあると

思うけど、挫けないで頑張るんだよ。

てるみ　おじさんもね。

惠太　　君は本当に逞しいな。どうしていつもにそんなに前向きでいられるんだい？

てるみ　たぶん、お母さんのせいだと思う。だって、あの人、いつもいつも前向きじ

やない。聞いた？　今度、『水戸黄門』に出るんだって。

惠太　　それは凄い。
また殺される役かもしれないけどね。

そこへ、敏郎がやってくる。

敏郎　　二人とも何してるですか？　上映、始めますよ。
てるみ　わかった。おじさん、行こう。

恵太
敏郎

敏郎君、頑張つてね。
頑張りますよ、最後の上映なんですから。さあ、行きましょう。

てるみ・敏郎が去る。
一九七九年六月一日朝、石川町にある楠本邸。恵太がやってくる。純子・檜原が迎える。
檜原は杖をついている。

檜原
恵太

久しぶりですね、春山さん。
ご無沙汰して、申し訳ありませんでした。でも、驚きましたよ。ホテルを辞めていたなんて。

檜原
柿沼

経営体制が変わったんです。こちらは新しい支配人の柿沼純子さん。
(恵太に) お会いするのは三度目ですよね。

恵太
純子

(檜原に) 柿沼さんは僕たちのことを？
この人から聞きました。何もかも？

恵太
檜原

(恵太に) あれから三年も何をしていたんですか？
いろんな仕事をしました。でも、どれも長続きしなくて。それでようやく腹を据えたんです。研究職に復帰しようと。やっぱり、僕はそれしか取り柄がないみたいです。

檜原
恵太

どこかの大学に入るんですか？
できれば、アメリカの大学に行きたいと思っています。でも、問題は戸籍なんです。僕には戸籍がないから、パスポートが作れない。それで、困った時は

檜原

僕はもう檜原じゃない。事情があつて、別の戸籍を手に入れたんです。

純子 　　そうだ。春山さんには、檜原の方の戸籍を差し上げたか？
檜原 　　それはいい。(恵太に) 僕にはもう必要ないんだ。よかったら、使ってくだ

恵太 　　さい。檜原弥九郎という戸籍です。

純子 　　喜んで使わせていただきます。
でも、ご両親のことはもういいんですか？　アメリカへ行ったら、なかなか

恵太 　　会えなくなるでしょう。
二人には一昨年、子供が生まれました。僕ですよ。今は二歳。両親の愛情に

純子 　　包まれて、すすすす育っています。
会いに行っただんですか？

恵太 　　いや、たまに遠くから覗き見を。僕にできることは何もない。僕は僕で、我

檜原 　　が道を行こうと思います。
困った時はまたいつでも来てください。

恵太 　　ありがとうございます。
純子・檜原が去る。
六月十一日朝、成田空港の出発ロビー。稲子がやってくる。恵太にデンパックを渡す。

稲子 　　行つてらっしゃい、恵太さん。

恵太 　　父と母のこと、よろしく願います。
任しといて。でも、よく私に本当のことを話す気になったね。

稲子 　　三十九年前に出発する前日、僕はあなたに挨拶に行つたんです。しばらく外

稲子 　　国へ旅行に行く。でも、あなたは本当の行き先を知ってるみたいだ。外
どうしてそう思ったの？

恵太

別れ際に言ったんですよ。「みんなによるしく」って。あの時のあなたの笑顔、今でもこの目に焼きついていきます。

稲子

それで記憶を失った後も、私の顔を覚えてたのね？

恵太

僕が覚えていたのは、六十四歳のあなたですけどね。

稲子

アメリカの大学へ行って、何を研究するの？

恵太

僕は新しいタイムマシンを作りたい。クロノス・スパイラルのような、行ったら行きっぱなしじゃなくて、元の時代に戻るタイムマシンを。

稲子がうなずいて、去る。恵太が歩き出す。シャッターが上がり、クロノス・スパイラルが回転を始める。